



始



1424
205

大正八年度農事試驗場事務功程

農事試驗場

142-205

大正八年度農事試驗場事務功程

目次

本場



- 一、稻及麥類人工交配試驗
- 二、水稻出穗期ノ變異ニ關スル研究
- 三、水稻ノ病的褐色葉ニ關スル研究
- 四、水稻愛國種ノ突然變異ニ關スル研究
- 五、水稻ノ特殊ナル縞葉ニ關スル研究
- 六、甘藷ノ一代雜種ニ關スル試驗
- 七、甘藷ノ型ノ保存
- 八、蘿蔔根ノ彎曲性ニ關スル遺傳研究

五	五	五	四	四	四	四	一
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁

大正
9. 11. 17
内交

九、水稻薄播多肥ニ關スル試驗	五
一〇、水稻施肥法試驗	六
一一、水稻酸化劑加用試驗	七
一二、稻及麥類豐凶考照試驗	七
一三、滿洲土壤ノ生産力ニ關スル試驗	七
一四、電氣栽培ニ關スル試驗	八
一五、電流ノ作物生育ニ及ホス影響試驗	八
一六、煙草苗床土壤ニ對スル殺菌劑使用試驗	九
一七、煙草ノ一代雜種ニ關スル試驗	〇
一八、煙草新品種育成ニ關スル試驗	一
一九、煙草肥料トシテ菜種油粕、大豆粕ノ優劣比較試驗	一
二〇、煙草品種ノ保存	一
二一、農具ニ關スル試驗及研究	二

農藝化學部

一、米麥作ト土壤ノ盡耗トノ關係	一	五
二、各種粕類ノ窒素肥効試驗	一	五
三、磷酸礬土礦ノ肥効ニ關スル試驗	一	六
四、石灰ノ濫用ニ關スル試驗	一	七
五、農作物ノ營養上加里及曹達ノ作用ニ關スル研究	一	七
六、農作物ニ有害ナル水素「イオン」ノ濃度ニ關スル研究	一	八
七、土壤溶液ノ水素「イオン」濃度ニ關スル研究	一	九
八、亞硫酸瓦斯ノ植物殊ニ農作物ニ及ホス障害ニ關スル試驗	一	九
九、米ノ炭水化物ニ關スル研究	二	二
一〇、葉煙草乾燥中ニ於ケル成分ノ變化ニ關スル研究	二	二
一一、「アミラーゼ」ニ關スル研究	二	三
一二、農産物ノ加工ト營養分トニ關スル試驗	二	三
一三、農家ノ食糧ニ關スル調査	二	四
一四、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ關スル調査	二	四

昆 蟲 部

一五、雨水ノ分析	二	五
一六、各種磷酸化合物ノ試薬ニ對スル溶解度ニ關スル研究	二	六
一、昆蟲ノ趣化性ニ關スル試驗	二	八
二、日本産實蠅類ノ種類調査	二	九
三、食用及藥用昆蟲ニ關スル調査	二	九
四、梨果ノ害蟲調査	二	九
五、二化性螟蟲卵寄生蜂ノ種類及其寄生歩合分布狀態ノ調査	三	〇
六、二化性螟蟲寄生蜂種類調査	三	〇
七、三化性螟蟲及其類似螟蟲類調査	三	一
八、栗「マタムシ」飼育及驅除試驗	三	一
九、跳蟲類ノ調査	三	一
一〇、植物寄生線蟲類調査	三	二
一一、益蟲保護器ニ關スル研究	三	二

病 理 部

一二、驅除藥劑ニ關スル研究	三	二
一三、害蟲及益蟲標本製作及驅除劑効力鑑定	三	三
一、紫雲英菌核病菌ノ菌核浸水試驗	三	三
二、紫雲英其他ノ雪腐ニ關スル調査	三	四
三、實芭蕉萎縮病ニ關スル試驗	三	四
四、殺菌劑膠質銅液一名硫酸銅石鹼液ニ關スル試驗	三	五

園 藝 部

一、蔬菜品種ニ關スル試驗	三	七
二、蔬菜栽培ニ關スル試驗	三	九
三、茄子青枯病免疫性新品種育成試驗	四	一
四、果樹ノ品種ニ關スル試驗	四	二
五、果樹ノ剪定及整枝ニ關スル試驗	四	二

六、果樹ノ砧木ニ關スル試驗	四三
七、接木ニ關スル試驗	四三
八、果樹ノ肥料三要素試驗	四三
九、温州蜜柑ノ酸量及糖量ニ關スル試驗	四四
一〇、各種果樹ノ花芽生成ニ關スル研究	四四
一一、柿ノ生理的落果ニ關スル研究	四四
一二、梨ニ於ケル交配ノ果形ニ及ホス影響ノ有無ニ關スル研究	四五
一三、果樹ノ授精能力及單爲結實(Parthenocarpy)ニ關スル研究	四五
一四、果樹ノ品種改良ニ關スル研究	四六
一五、果實及蔬菜ノ貯藏及加工ニ關スル試驗	四七
土 性 部	
一、本邦耕地ノ代表的土壤ノ特性ニ關スル試驗	四八
二、盤層ノ調査	四八
三、腐植質土壤中ノ磷酸ニ對スル加熱ノ作用ニ關スル研究	四九

畿内支場

一、稻及麥類品種育成ノ基本調査	五二
二、稻及麥類ノ新品種育成試驗	五二
三、水稻新品種ノ耐病試驗	五四
四、水稻ノ色素ニ關スル遺傳現象ノ研究	五四
五、稻及麥類ノ縞葉ニ關スル遺傳現象ノ研究	五五
六、稻及麥ノ不稔性ニ關スル研究	五六
七、水稻ノ變異ニ關スル研究	五七
八、米麥自然雜交ニ關スル研究	五七

九、麥ノ「リンケージ」ニ關スル研究	五	八
一〇、棉ノ純系淘汰試験	五	八
一一、甘藷品種比較試験	五	九
一二、品種保存	六	〇
一三、稻及麥類豊凶考照試験	六	〇
一四、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ 關スル調査	六	一
一五、雨水ノ分析	六	一

九州支場

一、稻、麥類及甘藷ノ品種特性調査試験	六	二
二、九州各縣ニテ育成セラレタル優良品種價值査定試験	六	三
三、稻及麥類人工交配試験	六	三
四、水稻株間試験	六	三
五、連年無肥料栽培試験	六	六

六、稻及麥類豊凶考照試験	六	六
七、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ 關スル調査	六	六
八、雨水ノ分析	六	七
九、灌溉水ノ分析	六	八
一〇、稻白葉枯病ノ收量及品質ニ及ホス影響試験	七	〇
一一、稻白葉枯病ニ關スル試験	七	三
一二、大麥、稗麥葉枯病ニ關スル試験	七	三
一三、柑橘ノ「ゴム」病ニ關スル試験	七	四
一四、茄子、蕃茄ノ連作ニ關スル試験	七	四

陸羽支場

一、稻麥及豆類ノ品種試験	七	五
二、甘藷ノ栽培ニ關スル試験	七	五
三、稻及麥類人工交配試験	七	七

四、水稻ノ諸形質ノ遺傳ニ關スル研究	七	八
五、赤米ノ遺傳現象ニ關スル研究	七	八
六、水稻ノ紫色花色素ノ遺傳現象ニ關スル研究	七	九
七、矮生稻ノ發生ニ關スル研究	七	九
八、水稻ノ不稔性ニ關スル試驗	八	〇
九、水稻特性ノ變異ニ關スル研究	八	〇
一〇、倒伏時期ノ收量並ニ品質ニ及ホス影響調査	八	一
一一、日照ノ稻ノ生育ニ及ホス關係	八	一
一二、水稻葉面積ト生産力トノ關係試驗	八	二
一三、稻及麥類豐凶考照試驗	八	二
一四、大豆ノ粒ノ大サノ遺傳ニ關スル試驗	八	二
一五、大豆ノ不結實性ニ關スル試驗	八	三
一六、紫蘇、荳胡麻ニ關スル雜種試驗	八	三
一七、「ヤマシソ」ニ關スル雜種試驗	八	三
一八、原野ニ於ケル施肥試驗	八	三

一九、肥料ト牧草トノ關係試驗	八	四
二〇、野草採草回数ニ關スル試驗	八	五
二一、火入試驗	八	五
二二、「コマツナギ」ニ關スル試驗	八	五
二三、三要素ト野草トノ關係試驗	八	六
二四、原野草勢ト水温並ニ光線トノ關係試驗	八	六
二五、生産要素ノ効果ニ關スル試驗	八	七
二六、堆肥中ノ三要素肥効試驗	八	七
二七、石灰連用試驗	八	八
二八、堆肥ノ冬季積雪上放置ト其窒素ノ損失ニ關スル試驗	八	八
二九、稻ノ品種ト窒素施用量トノ關係	八	八
三〇、玄米ト白米ノ消化率査定試驗	八	九
三一、刈取期ヲ異ニセル野草ノ消化試驗	九	〇
三二、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ關スル調査	九	〇

大正八年度農事試驗場事務功程

大正八年度中農事試驗場本支場ニ於テ施行セル事業ハ左ノ如シ



本場
種藝部

稻及麥類人工交配試驗

目的 人工交配ニ依リ水陸稻及麥類ノ優良新品種ヲ育成シ並ニ諸形質ノ遺傳現象ヲ研究セントスル

經過 本年度ニ於テ栽培セル雜種各代ノ組合セ數若クハ系統數左ノ如シ

水稻

(甲)	雜種第一代	組合セ數	一六組
(乙)	同 第二代	同	二〇組
(丙)	同 第四代	須賀一本×關取	二〇一系統

(丁)	雜種第五代	信州×愛國	一三八系統
陸稻			
(甲)	雜種第一代	組合七數	二〇組
(乙)	同 第二代	同	一四組
大麥及稈麥			
(甲)	雜種第一代	組合七數	七三組
(乙)	同 第二代	同	一四組
(丙)	同 第三代	青稈×青稈 <small>(不結實性)</small> 青稈×十條	五〇系統 六五系統
(丁)	同 第四代	「ゴールデンメロン」×「ヒマラヤ」大麥 米稈×三德 米稈×鎌折 青稈×野地四石 米稈×青稈 鎌折×野地四石	二五系統 二九系統 四八系統 五四系統 三三系統 四一系統

(戊)	同 第五代	野地四石×「ゴールデンメロン」 薄皮×「ゴールデンメロン」	一五二系統 一〇四系統
小麥			
(甲)	雜種第一代	組合七數	二六組
(乙)	同 第二代	同	七組
(丙)	同 第三代	達磨×濠洲二號	六三系統
(丁)	同 第四代	「ホワイト」×濠洲三號 「ホワイト」4 × 「ホワイト」31 「ホワイト」V × 「ホワイト」II-31 相州×「フルツ」	四三系統 三五系統 一七〇系統
(戊)	同 第五代	十條×相州	九八系統

以上ノ中大麥及稈麥(丙)青稈×青稈(不結實性)ハ芒長ト柱頭トノ關係、「ゴールデンメロン」×「ヒマラヤ」大麥ハ崎形芒ト普通芒トノ關係、(丁)鎌折×野地四石ハ皮、稈、芒長、穗長ノ「リンケージ」ノ關係ニ就キ又小麥(丁)「ホワイト」、バラバラ」×濠洲三號ハ不結實性ニ關スル形質ノ遺傳現象ニ就キ併セテ研究ヲ行ヘリ

成績 本試験ハ繼續中ニシテ未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

二、水稻出穂期ノ變異ニ關スル研究

目的 水稻出穂期ノ變異殊ニ其變異曲線ノ「スキユネツス」(Greenness)ニ就キ研究セントスルニアリ
經過 本年度供試品種ハ愛國三四系統、荒木四八系統ナリ
成績 尙繼續研究ヲ要シ未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

三、水稻ノ病の褐色葉ニ關スル研究

目的 外觀病の現象ヲ呈スル褐色葉ノ遺傳研究ヲ目的トスルニアリ
經過及成績 竹成外一種三十系統ニ就キ病の褐色葉ハ遺傳質ニ基因スルコトヲ確メタルヲ以テ其遺傳現象研究ノ爲メ本年度ニ於テ普通綠葉稻トノ雜種ヲ行ヒタリ

四、水稻愛國種ノ突然變異ニ關スル研究

目的 愛國種ノ突然變異ヲ研究シ併セテ優良新品種ヲ撰擇育成セントスルニアリ
經過及成績 大正七年度ニ開始シ本年度ニ於ケル供試系統四十四中優良多蘖ナル突然變異種ヲ發見セリ

五、水稻ノ特殊ナル縞葉ニ關スル研究

目的 特殊ナル縞葉稻ニ就キ其遺傳及葉綠素ノ形成ニ關シ研究セントスルニアリ
經過 本年度供試品種ハ輪枝稻十五系統ナリ

成績 尙繼續研究ヲ要シ未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

六、甘藷ノ一代雜種ニ關スル試驗

目的 一代雜種ヲ利用シテ甘藷ノ優良新種ヲ育成セントスルニアリ
經過 沖繩縣下ニ於テ育成セル原種ニシテ本年度供試系統ハ二十五ナリ

成績 尙繼續栽培スルニアラサレハ新品種ノ良否ニ就キ決定スルコト能ハス

七、甘藷ノ型ノ保存

目的 分離セシ型ノ保存ヲ目的トスルノ外芽變リニ關スル調査ヲ併セ行ハントスルニアリ

經過及成績 本年度供用品種高須種七系統、下總白種二四系統中皮色ニ關スル芽變リヲ發見シタルヲ以テ尙進ンテ繼續試驗セントス

八、蘿蔔根ノ彎曲性ニ關スル遺傳研究

目的 一種根ノ著シキ彎曲性ヲ有スルモノアリ其遺傳現象ヲ研究セントスルニアリ

經過 本年度ニ於テハ雜種第二代目(組合セ數二)ニ就キ實驗セリ

成績 尙繼續研究スルニアラサレハ成績ヲ決定スルコト能ハス

九、水稻薄播多肥ニ關スル試驗

目的 當場水田ノ如キ排水不良ニシテ有機質ニ富ミ生産力少ナキ地方ニ於ケル生産力増進ノ一方法

トシテ薄播苗ヲ仕立テ且本田ニ於ケル施肥量ヲ増加スルノ得失ニ就キ試験セントスルニアリ
 經過 前年ニ繼續シ播種量坪當五勺、一合、一合五勺、二合、二合五勺(標準)ニ區分シ且本田施肥
 量ヲ普通肥區(當場慣用量)多肥區(反當人糞尿一石八斗追肥)ニ分チ試験セルモノニシテ本年ハ試
 驗開始後第三年目ニ當レリ

成績 本年度ノ成績ニ據レハ五勺乃至二合五勺ノ範圍内ニ於テハ播種量ノ多少ニヨリ收量ニ著シキ
 差違ヲ認メサリシモ多肥區ハ何レモ普通肥區ニ優リ本田肥料トシテハ從來ノ慣用量ニ比シ尙増施
 スルノ要アルヲ示セリ

一〇、水稻施肥法試験

目的 稻作上當場田土ニ適當ナル施肥法ヲ攻究セントスルニアリ
 經過 前年ニ繼續シ當場慣用肥料中ノ大豆粕ヲ元肥(標準)ニ施スモノト之レヲ追肥トスルモノトノ
 得失ヲ試験スルノ外大豆粕ニ代ユルニ米糠ヲ以テ追肥ニ施スモノ及標準肥料(大豆粕元肥)ニ加フ
 ルニ更ニ米糠ヲ追肥トスルモノ、効果ヲ試験セルモノニシテ本年ハ試験開始後第三年目ニ當レリ
 成績 前年ノ成績ニ據レハ基本肥ノ外ニ米糠ヲ追肥トシテ使用セルモノ最モ優リタルモ本年度ニア
 リテハ標準區少シク他區ニ優リ大豆粕代用米糠追肥區及米糠増施追肥區之レニ亞ケルモ其差ハ大
 ナラス而シテ大豆粕追肥區ハ最モ劣レリ

一一、水稻酸化劑加用試験

目的 水稻栽培上酸化劑施用ノ効果ヲ驗知セントスルニアリ
 經過 當場水田ノ如キ有機質ニ富メル土壤ニ對シ過滿俺酸加里其他ノ酸化劑ヲ加用スルトキハ稻作
 上多少ノ効果アルコトハ前年植木鉢試験ノ結果ニ依リ認メタルヲ以テ之レヲ本田土壤ニ應用シ實
 際的價值ヲ確メシカ爲メ前年來繼續施行セルモノニシテ一反步當リ過滿俺酸加里「キロ」、「キ
 ロ」、「五キロ」ノ割ニ使用シ試験セリ

成績 本年度ノ成績ニ據レハ「キロ」及「五キロ」加用區最モ優リ「キロ」區之ニ亞キ標準區(不加
 用)最モ劣リ前年ニ於ケル植木鉢試験ト等シク實際上ニ於テモ酸化劑ノ効果アルコトヲ證セリ

一二、稻及麥類豊凶考照試験

目的 氣候ノ稻及麥類ノ生育收量ニ及ホス影響ヲ攻究セントスルニアリ
 經過 明治二十九年以來一定ノ米麥品種ヲ撰ヒ毎年同一管理法ニヨリテ栽培シ其生育及收量ヲ調査
 シ之レヲ其年次ニ於ケル氣候狀態ニ稽ヘ且前年度ノ調査ト對照シテ米麥豊凶ノ査定資料ニ供スル
 ト共ニ氣候對栽培法改良ノ參考ニ供セントス

成績 本年度ノ成績ハ時々之レヲ報告セリ

一三、滿洲土壤ノ生産力ニ關スル試験

目的 滿洲地方ニ於ケル土壤ノ生産力ヲ驗知セントスルニアリ

經過 滿洲各地方ヨリ蒐集セル土壤ニ就キ大麥ヲ用ヒ三要素試驗ヲ施行シ繼續九ケ年ニ及ヘリ

成績 滿洲地方ノ土壤ハ一般ニ有効加里ノ量頗ル豊富ニシテ今日ニ至ルモ尙無加里區ノ生産量完全

肥料區ニ劣ラサルモノアリト雖モ窒素ハ著シク缺乏シ磷酸モ亦鐵嶺及哈爾濱地方ニ稍々富メルモ

ノアルノ外其他ハ孰レモ缺乏シ既ニ無窒素區及無磷酸區ノ狀態ニアリテハ殆ント生育ヲ遂ケサル

モノアルニ至レリ

一四、電氣栽培ニ關スル試驗

目的 作物栽培上電氣利用ノ效果ニ關シ攻究セントスルニアリ

經過 地上一定ノ距離ニ網狀ニ架線シ之レニ高壓電氣ヲ通セル下ニ作物ヲ栽培スルトキハ其生育及

收量ヲ増進スルコトハ「レームストローム」氏ノ唱導以來各地ニ於テ實驗證明セラレ當場ニ於テモ

其實驗ヲ重ネタルモ未タ其據テ來ル原因ニ至リテハ充分闡明セラル、ニ至ラス依テ更ニ設備ヲ整

ヘ再ヒ之レカ試驗ヲ開始セリ

成績 本年度ニ於テハ六萬「ボルト」ノ電壓ノ下ニ廿日大根ヲ栽培シタルニ却テ通電區ハ成績不良ナ

リキ依テ壓力ヲ低下シ更ニ大麥ヲ栽培中ナルモ未タ其成績ヲ確ムルノ域ニ達セス

一五、電流ノ作物生育ニ及ホス影響試驗

目的 土壤ニ電流ヲ通シ作物ノ生育上如何ナル影響アルヤヲ驗知セントスルニアリ

經過 前年來水稻及大麥等ニ就キ繼續試驗セル所ニシテ直流又ハ交流電氣ヲ土壤ニ通シ標準區ニ比

較シ作物ノ生育及收量ニ及ホス影響ヲ試驗セリ而シテ本年度ニ於テハ水稻ヲ用ヒ生育中交流電氣

ヲ通シ試驗セリ

成績 前年大麥ニ於ケルト等シク交流ノ場合ニ於テモ標準區ニ比シ生育上差違ヲ認メサリキ

一六、煙草苗床土壤ニ對スル殺菌劑使用試驗

目的 煙草苗床土壤ニ發スル病害ノ豫防ト共ニ苗ノ生育ヲ促進セシメントスルニアリ

經過 前年來連用セル苗床土壤ヲ「フォルマリン」二〇%液ヲ以テ處理シ頗ル好結果ヲ得タルヲ以テ

更ニ其濃度ニ對スル効果ヲ驗センカ爲メ二、五%、五%、一〇%ノ區別ニテ土壤ヲ殺菌シ試驗ヲ

行ヘリ

成績 右試驗ノ結果ニ據レハ新土壤ニテモ其效果ヲ認メ得ルモ殊ニ連用土壤ニ於テ甚タ顯著ニシテ

移植期(五月中旬)ニ至リテハ草丈約二寸ノ差違ヲ生シ其生育迅速ナルコトヲ認メタリ即チ左ノ如

シ

新土壤

標準區	草丈	最大葉長	最大葉幅	平均一本ノ生量	同上乾量
二、五 % 區	五、四四	四、三五	一、九五	四、七二四	〇、三三五
五 % 區	六、二五	四、八八	二、一七	六、五四四	〇、三七七
一〇 % 區	六、三三	四、九四	一、九二	六、二五九	〇、四〇三
	七、二〇	五、五五	二、三三	八、五六四	〇、六〇九

三年連用土壤

標準區	草丈	最大葉長	最大葉幅	平均一本ノ生量	同上乾量
二、五 % 區	二、一〇〇	一、七八	一、〇〇	〇、九八二	〇、一五
五 % 區	三、三七	三、〇〇	一、六一	三、〇八六	〇、三〇六
一〇 % 區	三、八〇	三、三五	一、六五	二、八二二	〇、二六九
	四、四三	三、七三	一、八八	三、九五九	〇、三四一

一七、煙草ノ一代雜種ニ關スル試驗

目的 煙草ノ生育、收量及品質ニ關シ雜種第一代ト兩親トノ優劣如何ヲ調査セントスルニアリ
經過 水府×出水、三浦×新田、上地×「マニラ」、水府×上座ノ四種ノ雜種第一代ニ就キ大正六年

度以降繼續試驗セリ

成績 年ニ依リ亦品種ニ依リ多少ノ相違アレトモ一般ニ雜種第一代ハ其苗床ニ於ケル苗ノ生育速カニシテ本圃ニ移植後モ亦良好ナリ例セハ出水葉ハ晩熟種ナレトモ水府葉ト交配セルモノハ開花期出水葉ニ比スレハ早キカ如シ而シテ品質收量ニ關シテモ亦兩親ニ比シ敢テ遜色ナキノミナラス品種ニ依リテハ常ニ收量甚タ多ク品質モ佳良ナルモノアルヲ認メタリ

一八、煙草新品種育成ニ關スル試驗

目的 人工交配ニ依リ優良ナル煙草新品種ヲ育成セントスルニアリ
經過及成績 前年來繼續施行セルモノニシテ本年度ニ至リ水府葉ト出水葉トヲ交配セルモノニ就キ調査セル結果七系統ヲ撰出シ次年ニ於テ更ニ比較栽培ヲ行フノ豫定ナリ

一九、煙草肥料トシテ菜種油粕、大豆粕ノ優劣比較試驗

目的 煙草肥料トシテ菜種油粕ト大豆粕トノ優劣ヲ比較セントスルニアリ
經過 前年來菜種油粕及大豆粕ヲ略、同大ノ粉末トナシテ施給シ或ハ豫メ適宜醱酵セシメテ施與シ其効果ヲ比較セリ

成績 調査ノ結果ニ據レハ大豆粕ヲ用ユルモ菜種油粕ニ比シ葉煙草ノ品質不良ナラサルコトヲ認メタリ

二〇、煙草品種ノ保存

目的 各特性ヲ異ニセル煙草ノ標準品種ヲ保存センカ爲メ左記各品種ヲ栽培中ナリ

國分葉、出水葉、指宿葉、垂水葉、谷山葉、黒葉、阿蘇葉、豊後葉、肥後葉、沖繩葉二種、上座葉、竹田葉、東城葉、日野葉二種、米子葉、作州葉二種、備後葉、備中葉、阿波葉、宇陀葉、新田葉、上地葉、中野葉、大草葉、遠州葉、秦野葉、三浦葉、鶴來葉、龍王葉、蓮華葉、桐ヶ作葉、達摩葉二種、水府葉、大子大葉、松川葉、會津葉、米澤葉、大迫葉

「トルコ」(二種)、「ブライトイエロー」、「イエローオロノコ」、「コンクエロール」、「リットルダッチ」、「ブラデル」、「ボルタアバジヨ」、「スマトラ」、「マニラ」、「デンマーススバニツシユ」、「ベルシアン」、「ペンシルバニア」、「クキンスランド」、「ホンジュラス」、「イエローブライオル」、「滿洲葉

二一、農具ニ關スル試験及研究

(一) 堰反轉ヲ充分ナラシムヘキ犁鑿ノ曲度及其形狀ノ改良ニ關スル研究

目的 從來ノ犁鑿ハ堰ノ反轉作用完カラサルヲ以テ之レカ構造ニ改良ヲ加ヘ其效果ヲ完クセシメン
トスルニアリ

經過及成績 前年ヨリ犁鑿ノ曲度及形狀ニ就キ研究ヲ重ネ其試製ヲ終リタルモノ已ニ三種ニ及ヘリ而シテ此等ノ改良犁試驗ノ結果中庸土質ニシテ含水量程度普通ナルニ於テハ和式犁ニ劣ラサル反轉

作用ヲ爲スヲ認メタリ

(二) 使用上其安定ヲ保ツヘキ犁各部ノ關係的構造ニ關スル研究

目的 犁ノ使用上其安定ノ度不良ナルハ和式犁短床型ノ缺點ナルヲ以テ之レカ改良ヲ試ミントスル
ニアリ

經過及成績 平起用犁、畦立用犁共短床犁型及兩手犁型ノ各部ノ關係的改良構造ヲ考案シ此等ヲ試
製セリ

(三) 耕幅ヲシテ一定ナラシムヘキ犁ノ構造ニ關スル研究

目的 耕幅ヲ一定ナラシムル爲メ使用者ノ技術ヲ要スルコト多キハ和式犁構造上ノ通弊ナルヲ以テ
此缺點ヲ補フニ足ルヘキ改良ヲ加ヘントスルニアリ

經過及成績 耕幅ヲ一定ナラシムヘキ方法ノ一トシテ犁床ニ測壓均合裝置ヲ考案試製シ當場ニ於テ
人力ニ依リ試驗セル結果其效果アルヲ認メタリ又耕幅一定ヲ計ルニハ更ニ犁轆、犁轆、牽引鈞ニ
改良ヲ加フヘキ點アルヲ以テ此等ノ點ニ關シテハ改良ノ考案ニ就キ試製中ナリ

(四) 堰單位斷面積ニ對スル犁ノ抵抗比較試驗

目的 耕起ノ際ニ於ケル犁ノ抵抗ヲ比較シ本邦產牛馬ニ適應スヘキ犁ノ抵抗ヲ定メントスルニアリ
經過及成績 各種ノ犁ニ就キテ其單位堰斷面ニ對スル抵抗ヲ測定セルニ在來犁ハ其構造ニ依リテ著

シキ差異アルゴトヲ認メタリ

(五) 畜力ニ關スル試驗

目的 犂ノ使用上牛馬ノ堪ヘ得ヘキ牽引力ヲ測定セントスルニアリ

經過及成績 廣島縣及千葉縣ニ於テ本場ノ製作ニ係ル改良自記牽引力計ニ依リ施行セリ其成績ノ大要左ノ如シ

(甲) 牛馬ノ瞬間最大牽引力ハ年齡、體重、身高、脚長、體格、牝牡ノ別其他生理狀態等ニ依リ多少ノ差異アリト雖モ馬ニ於テハ七百斤乃至八百斤、牛ニ於テハ六百斤乃至七百斤ヲ其中庸數トス而シテ牛馬ノ精神狀態ハ瞬間最大牽引力ノ大小ニ影響スルコト多大ニシテ使役時ニ於テ比較的力量ノ少ナキモノト見做シタル牛馬ト雖モ其ノ臆病ナルモノニ於テハ瞬間最大牽引力比較的大ナル數ヲ現ハシ九百斤以上ニ達セルモノアルヲ見タリ

(乙) 耕牛ノ牽引法ハ牝牡ノ別ニ依リ差異アルハ動力計ノ線圖ニ依リ之ヲ確ムルコトヲ得タリ牝牛ハ牝牛ニ比シ歩行ニ供フ時々刻々ノ牽引變化比較的多ク殊ニ「シンメンタール」雜種ハ其變化最モ大ナルコトヲ示セリ換言スレハ牝牛ハ肩引ヲ以テ重ナル牽引法トナシ牝牛ハ胸引ヲ以テ重ナル牽引法トナシ同一ノ牽引速度ニ於テハ牝ハ牝ニ比シ其歩調細ナリトス

(六) 製繩機及製蔴機ニ關スル比較試驗

目的 本省ノ依囑ニ依リ製繩機及製蔴機ノ功程ヲ比較セントスルニアリ

經過及成績 供試機到着ノ遅延、職工雇人ノ關係ヨリ未タ完成セサルノミナラス其製作品(繩、蔴)ニ就キ調査試驗ヲ結了セサルヲ以テ未タ其成績ヲ掲クルコト能ハスト雖モ要スルニ其構造複雑ナルモノハ故障起リ易ク或ハ對久性ヲ缺クモノ多ク或ハ徒ニ價格ノ高キニ過クルモノハ農家ノ實用ニ適セサルヲ認メタリ

農藝化學部

一、米麥作ト土壤ノ盡耗トノ關係

目的 米麥ノ連作ニ由リ土壤主要成分ノ減少スル程度ヲ明ニスルト共ニ不完全ナル施肥カ米麥ノ生育、收量及子實ノ品質ニ及ホス影響ヲ調査セントスルニアリ

經過及成績 明治三十七年以來繼續研究中ノモノニシテ亞鉛製無底大圓筒ヲ水田及畑地ニ埋裝シ無肥料、無窒素、無磷酸、無加里及三要素ノ五區ヲ設ケ化學肥料ヲ施用シ年々水稻又ハ大麥ヲ栽培シ其ノ收穫物ヲ分析シ土壤ハ一定年月ノ後其成分ヲ定量ス米作ニ關シテハ大正七年其成績ヲ發表セリ本年度ニ於テモ前年ト同一ノ試驗ヲ施行シ目下收穫物ノ分析中ナリ

二、各種粕類ノ窒素肥効試驗

目的 椰子油粕其他窒素含量多カラサル植物性粕類十三種ニ於ケル窒素ノ稻作及麥作ニ對スル肥効ヲ査定スルニアリ

經過 本試験ニハ陶製「ポット」ヲ用キ各「ポット」ニハ荒川沖積土ヲ填充シ肥料トシテ窒素ハ各「ポット」ニ〇、五瓦及〇、二五瓦宛ニ相當スル量ヲ各供試肥料ニテ施シ磷酸及加里ハ各「ポット」ニ一瓦宛ニ相當スル量ヲ磷酸曹達及硫酸加里ニテ施セリ稻作ニアリテハ關取種ヲ栽培シ麥作ニアリテハ三德種ヲ栽培セリ

成績 稻作ニアリテハ其生育ノ狀況ニ就キ稽フルニ其施用ノ窒素量ハ同一ナルモ肥料ノ種類ニ依リ肥効ニ差異アルヘキヲ認メタリ而シテ其收量ニ及ホセシ影響並ニ稻作ニ依リ攝取利用セラレタル各肥料ノ窒素量ニ關シテハ目下調査中ニ屬ス尙ホ右稻作ニ對スル殘効並ニ麥作ニ對スル肥効ハ目下栽培試験中ナリ

三、磷酸礬土礦ノ肥効ニ關スル試験

目的 磷酸ノ含量多キモ肥料トシテ利用セラル、コト稀ナル磷酸礬土礦並ニ同礦ヲ處理シタルモノノ磷酸ノ肥効ヲ査定スルニアリ

經過及成績 本試験ニハ陶製「ポット」ヲ用キ各「ポット」ニハ西ヶ原本場畑土ヲ填充シ肥料トシテ磷酸ハ沖繩縣北大東島ヨリ産出スル磷酸礬土礦ヲ以テシ之レカ比較トシテ過磷酸石灰並ニ他ノ普通

磷酸ニテ反當二貫匁及一貫匁ニ相當スル様施シ窒素及加里ハ反當五貫匁宛ノ割合ニテ硫酸「アンモニア」及硫酸加里ニテ施シ別ニ石灰末ヲ各「ポット」ニ五瓦宛施セリ而シテ本試験ハ本年度麥作ヨリ施行セシモノニシテ目下大麥三德種ヲ栽培試験中ナリ

四、石灰ノ濫用ニ關スル試験

目的 石灰濫用ノ土壤及農作物ニ及ホス影響ヲ確定セントスルニアリ

經過及成績 明治三十七年以來繼續施行セルモノニシテ數種ノ土壤ニ化學肥料ヲ施用シ之ニ石灰ヲ施サ、ルモノ(標準區)ト施セルモノ(石灰區)トニ區別シテ年々水稻及大麥ヲ栽培シ其生育及收量ヲ比較シ一定ノ年月ヲ經過シタル後供試土壤ヲ分析シテ成分ノ變化等ヲ調査セシニ最初十年間ハ各土壤ヲ通シテ石灰加用ノ爲メ著シク收穫増加ヲ認メシモ爾來年ヲ追フテ增收ノ割合減少シ本年度ニ於テハ石灰加用ノ土壤ニアリテハ麥ノ生育及收量ハ之ヲ加用セサルモノニ比シ著シク劣ルニ至レリ但シ稻作ニアリテハ未タ斯ノ如キ差異ヲ認ムルニ至ラス

五、農作物ノ營養上加里及曹達ノ作用ニ關スル研究

目的 農作物ニ於ケル曹達ハ加里ノ作用ヲ補充シ得ヘキヤ否ヤハ學術上及實際上極メテ重大ナル問題ナルカ故ニ之レカ解決ニ資セントスルニアリ

經過及成績 前年來水稻、大麥、大豆及蕎麥ニ就キ水耕、砂耕及土耕試験ヲ行ヒ其ノ結果曹達鹽ハ

加里鹽ノ作用ノ一部分ヲ補充シ得ルコトヲ認メタルモ本年度ニ於テハ更ニ進シテ右曹達鹽ノ加里ノ作用ニ對スル補充關係ヲ一層精確ニ研究セント欲シ水稻及大麥ニ就キ試驗ノ區數ヲ増加シテ水耕試驗ヲ施行シ且其ノ收穫物ヲ分析シタリ右成績ニ依レハ加里鹽缺乏ノ度大ナルニ從ヒ曹達鹽ハ直接間接ニ之カ作用ヲ補充スル程度モ亦大ナルヲ認メタリ

六、農作物ニ有害ナル水素「イオン」ノ濃度ニ關スル研究

目的 農作物ハ培養液ノ酸度又ハ鹽基度ニ依リテ著シク生育ヲ異ニシ其酸度又ハ鹽基度ハ水素「イオン」ノ濃度ニ比例スルモノナルヲ以テ農作物ニ有害ナル程度ノ水素「イオン」ノ濃度ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 水素「イオン」ノ濃度ヲ異ニセル數種ノ養液ニ稻ヲ短期間又ハ全生長期ニ互リテ培養セルニ幼稚ナル時期即チ種子中ノ貯藏養素未タ耗盡セサル期間ニアリテハ其全生長期間ニ互レル場合ニ比シ水素「イオン」濃度ノ影響稍、輕少ナリ概シテ酸性液ニアリテハ水素「イオン」ノ濃度指數五ヲ超ヘサル時ハ無害ナルモ其指數三ニ達スレハ著シク生育ヲ阻害セラレ二、八ニ於テ枯死セリ而シテ鹽基性液ニアリテハ水素「イオン」ノ濃度指數八ヲ超ヘサル時ハ無害ナルモ九ニ達スレハ明カニ生育ヲ阻害セラレ一〇ヲ超ユレハ被害顯著ニシテ一二ニ達スレハ枯死セルヲ認メタリ
備考 純水ノ水素「イオン」濃度指數ハ七ニシテ溶液ノ鹽基性若クハ酸性ナルニ從ヒテ指數ハ七

ヨリ増加若クハ減少ス

七、土壤溶液ノ水素「イオン」濃度ニ關スル研究

目的 土壤溶液ノ水素「イオン」ノ濃度ハ農作物ノ生育ニ大ナル關係アルヲ以テ右水素「イオン」ノ濃度ハ肥料ノ施用ニ依リ如何ナル影響ヲ受クヘキカヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 酸度ヲ異ニセル數種ノ酸性土壤ニ乾土一研ニ就キ窒素及加里各〇、一八八瓦、磷酸〇、〇九五瓦ノ割合ニテ硫酸安母尼亞、硝酸曹達、磷酸石灰、磷酸曹達、硫酸加里及炭酸加里ヲ單獨又ハ配合シテ施用シ水濕ヲ畑及水田ノ兩狀態トナシ一定時期ノ後土壤溶液及上澄液ヲ採リテ其水素「イオン」ノ濃度ヲ檢定セリ概シテ畑狀態ノ場合ニアリテハ試驗ニ供用セル磷酸及加里肥料ハ上記ノ施量ニテハ土壤溶液ノ水素「イオン」濃度ニ著シキ影響ヲ及ボサ、ルモ硫酸安母尼亞及硝酸曹達ハ明カニ其水素「イオン」ノ濃度指數七ヨリ小ニシテ酸度ノ増進セルヲ示セリ尙炭酸石灰ノ土壤溶液ニ及ボス影響ヲ試驗セルニ炭酸石灰ハ能ク土壤及肥料ニ基ク土壤溶液ノ酸度ヲ調節スルノ効果アルコトヲ認メタリ又水田狀態ニアリテハ土壤溶液ノ水素「イオン」濃度ト上澄液ノ水素「イオン」濃度トニ相互特殊ノ關係アルカ如キコトヲ認メタルモ未タ明カナラサルヲ以テ繼續試驗中ナリ

八、亞硫酸瓦斯ノ植物殊ニ農作物ニ及ボス障害ニ關スル試驗

目的 亞硫酸瓦斯ノ植物ニ及ボス障害ヲ精査スルニアリ

經過 本試驗ニアリテハ特殊ノ裝置ニ各種ノ植物ヲ収メ同裝置内ニ各種濃度ノ亞硫酸瓦斯ヲ發生或ハ送入セシメテ試驗ヲ施行シ又氣孔關係ノ試驗ノ一部ニアリテハ特殊ノ裝置ニ依リ葉面ノ一局部ニ瓦斯ヲ接觸セシメタリ尙ホ本試驗ニ供シタル植物ハ主トシテ「ボット」ニ植栽セシモノナルモ挫折及氣孔關係試驗ノ一部ハ樹木ノ枝梢ヲ供用セシモノアリ

成績 本試驗中尙ホ試驗繼續中ニ屬スルモノアルモ今日迄ニ得ラレタル成績ノ概要ハ左ノ如シ

- (一) 瓦斯狀亞硫酸ト霧狀亞硫酸トノ關係 各種ノ植物ニ對シ瓦斯狀並ニ霧狀ニシテ其濃度ヲ等フシタル亞硫酸ヲ同一狀態ノ下ニ接觸セシメタルニ霧狀亞硫酸ノ植物ニ及ホス障害程度ハ恒ニ瓦斯狀亞硫酸ニ基ク障害ニ比シ大ナリ
- (二) 日光トノ關係 (イ) 瓦斯接觸前長ク暗所若クハ陰所ニ置キシ植物ハ普通ノ狀態ニアリシモノニ比シ瓦斯接觸ニ基ク障害大ナリ (ロ) 直射日光ノ下ニ瓦斯ニ接觸セシメタルモノハ暗所若クハ陰所ニ於テ接觸セシメタルモノニ比シ障害大ナリ (ハ) 瓦斯接觸後直射日光ニ曝セシモノハ接觸後陰所ニ置キシモノニ比シ障害大ナリ
- (三) 瓦斯接觸中ニ於ケル濕氣關係 亞硫酸瓦斯接觸ニ際シ瓦斯濃度同一ナルモ裝置内ノ濕氣ヲ多カラシメタル場合ハ濕氣少キ場合ニ比シ障害程度大ナリ
- (四) 葉面傷害トノ關係 葉面ニ裂傷ヲ附シ或ハ穿孔シテ亞硫酸瓦斯ニ接觸セシメタルニ此等傷害

局部ハ他部ヨリモ早く最初ニ傷害部ヲ繞リテ狭ク覆輪狀ニ漂白サル、モ其被害ハ局部ニ限定セラルルモノトス尙ホ葉面ヲ傷害セシモノト普通葉トハ傷害部以外ニ於ケル瓦斯接觸ニ基ク障害ニハ差異ヲ認メス

- (五) 萎凋トノ關係 萎凋セシメタル植物ト普通狀態ニ於ケルモノト同一裝置内ニテ同一濃度ノ亞硫酸瓦斯ニ接觸セシメタルニ萎凋セシメタルモノハ瓦斯接觸ニ基ク障害程度輕微ナルカ或ハ全ク障害ヲ認メス
- (六) 挫折枝梢トノ關係 挫折シタル枝梢ト普通狀態ノモノト同一裝置内ニテ同一濃度ノ亞硫酸瓦斯ニ接觸セシメタルニ挫折枝梢ハ瓦斯接觸ニ基ク障害程度ハ極メテ輕微ナルカ或ハ全ク障害ヲ認メス
- (七) 同化作用トノ關係 暗室ニ入レ同化作用ヲ阻止シタルモノト普通狀態ニ於ケルモノト同一裝置内ニテ同一濃度ノ亞硫酸瓦斯ニ接觸セシメタルニ同化作用ヲ阻止シタルモノハ瓦斯接觸ニ基ク障害ヲ認メス又一旦同化作用ヲ阻止シタルモノヲ常態ニ復セシムル時ハ同化作用ノ進行ニ比例シ瓦斯接觸ニ基ク障害程度増加セリ
- (八) 氣孔トノ關係 各種植物ニ對シ特殊ノ裝置ニ依リ葉ノ表面或ハ裏面ノ一部ニノミ亞硫酸瓦斯ヲ接觸セシメ煙斑ノ現出狀況ヲ檢セシニ氣孔ヲ有セザル葉面ニ接解セシメタルモノハ煙斑ノ現

出ヲ認メスシテ氣孔ノ存在スル葉面ニ接觸セシメタルモノハ葉面ノ表裏ニ論ナク煙斑ヲ現出セ

九、米ノ炭水物ニ關スル研究

目的 米ノ炭水物ハ主トシテ澱粉ニシテ他ニ少量ノ糖分存在スルモ其性質未タ明カナラサルヲ以テ糖分ヲ分離シ其種類ヲ確定セントスルニアリ

經過及成績 米粒ノ各部ニ於ケル糖分ノ分布ヲ檢定セルニ米ノ糖分ハ主トシテ糖類ニ「メンザイ」中ニ存在スルコトヲ確定シ更ニ進ンテ「メンザイ」ヨリ「グルコサゾン」トシテ葡萄糖ヲ檢出シ多量ノ蔗糖ヲ結晶トシテ分離セリ麥芽糖及大小麥中ニ存在スル「ラフィノース」ハ糠中ニ存在セサルコトヲ確メタリ

一〇、葉煙草乾燥中ニ於ケル成分ノ變化ニ關スル研究

目的 本邦產葉煙草ニ就キ乾燥期中ニ於ケル葉ノ所合成成分ノ變化ヲ研究セントスルニアリ

經過 成熟セル水府葉ノ生葉ヲ其一部ハ可及的速ニ乾燥シ他ハ普通ノ屋内幹干法ニ從ヒ乾燥セシメ右二種ノ供試材料ヲ大正三年度以降三回取リテ有機無機ノ諸成分ヲ分析セリ

成績 灰分ニハ大ナル變化ヲ認メサレトモ有機成分ニハ増減アリ例ヘハ蛋白質糖分ノ如キハ乾燥中著シク減少シ「ニコチン」、枸橼酸「アンモニア」ノ如キハ稍増加スルカ如シ而シテ本年度ニ至リ

略、分析ヲ終了セルヲ以テ特ニ窒素化合物ニ關シ其變化ヲ研究センカ爲メ更ニ材料ヲ取リテ引續キ分析中ナリ

一一、「アミラーゼ」ニ關スル研究

目的 本研究ハ新鮮ナル動植物性物質ニ生スル酵素作用中澱粉ヲ糖化スル「アミラーゼ」作用ノ有無及強弱ヲ檢定スルニアリ

經過及成績 米糠、大豆、蠶豆、豌豆ノ葉、紫蘇ノ葉、卵白、卵黃、雞鷄ノ餌袋、肝臟、脾臟等ノ供試材料ニ水及「トリオール」ヲ加ヘ置キタルモノト一%澱粉液及「トリオール」ヲ加ヘ置キタルモノトニ於ケル還元糖ノ生成量ハ何レモ後者ニ於テ著シク「アミラーゼ」ハ廣ク動植物界ニ存在シ殊ニ米糠、豆類中ニハ其作用著シク卵黃ハ卵白ヨリモ其作用著シク脾臟ハ勿論肝臟ニ於テモ其作用稍著シク餌袋ハ其作用著シカラサルコトヲ示セリ

一二、農産物ノ加工ト營養分トニ關スル試驗

目的 本試驗ノ目的ハ農産物ヲ加工シテ食糧品ニ調製スル場合ニ副産物中ニ移行スル營養分量、加工ノ際損失ニ歸スヘキ營養分量等ヲ分析的及熱量的ニ精査シ以テ農産物ノ加工方法ノ改良、副産物ノ利用等ニ資セントスルニアリ

經過及成績 玄米及大麥ヲ「ナシヨナル」精米麥機ニテ精白シ玄米、白米、半搗米、糠、米芽、大麥、

丸麥、麥糠、麥碎等ニ就キ目下分析的及熱量的ニ研究中ナリ
一三、農家ノ食糧ニ關スル調査

目的 本邦農家ノ食糧ヲ實際ニ調査シ其營養上ノ關係及食糧ノ調製ニ際シ營養物損失ノ程度ヲ明カ
ニセントスルニアリ

經過及成績 農繁ト農閑ノ時季ニ於ケル農家ノ食糧及其原料並ニ排出物ヲ蒐集シ化學的分析及熱量
測定ヲ施行セリ本調査ハ今後續行スルニ非ラサレハ成績ヲ發表スルニ至ラス

一四、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ關スル調査

目的 土壤ハ大氣中ヨリ窒素化合物ヲ吸收スルカ故ニ其最大限度ヲ確定シ肥料施用ニ必要ナル資料
ヲ得ントスルニアリ

經過及成績 硝子皿(直徑八寸三分、深二寸五分、面積一反歩ノ二萬分ノ一ニ相當ス)ニ硫酸及炭酸
加里ノ各五%液五〇〇㏄ヲ盛り滿一ヶ月間雨露ノ入ラサル様大氣中ニ放置シ毎月末一回採集シテ
其吸收セル窒素化合物ヲ定量スルモノニシテ大正八年ニ於ケル成績ハ左ノ如シ但シ耕地一町歩ニ
對スル量ヲ示ス

安母尼亞態窒素 二一、一八九瓦
硝酸態窒素 二、〇一六瓦

四、亞硝酸態窒素

合計

一、〇〇〇瓦
二四、二〇五瓦

尙ホ右ノ調査ハ硫酸及炭酸加里ノ各五%液ニ吸收セラレタル量ナリト雖モ同時ニ單純ノ蒸餾水(安
母尼亞若クハ硝酸ヲ含マサル特別製ノモノ)ニ吸收セラル、分量ヲ調査セルニ其成績ハ左ノ如シ

安母尼亞態窒素 一一、五〇四瓦
硝酸態窒素 九九四瓦
亞硝酸態窒素 痕跡
合計 一二、四九八瓦

一五、雨水ノ分析

目的 雨雪ニ依リテ耕地ニ降下スル化合物窒素ノ量ヲ檢定シ肥料施用ニ必要ナル資料ヲ得ントスルニ
アリ

經過及成績 硝子製大漏斗(口徑三尺三寸八分五厘)貳個ヲ高サ六尺ノ亞鉛製圓筒臺ニ嵌メテ圃地ニ
安置シ雨水ヲ採集シテ之ヲ分析シ別ニ雨量計ニ依リ降水量ヲ測定シ耕地一町歩ノ面積ニ降下スル
成分量ヲ算出スルモノナリ大正八年一月ヨリ同十二月ニ至ル成績ハ左ノ如シ

大正八年	降雨日數	降雨量	窒素量 (一町歩ニ對スル量)	
			安母尼亞態	亞硝酸態
一月	一五	八〇・一	九三七・八一	二五八・二四
二月	一二	一三三・三	六七三・七九	一八九・四一
三月	一四	九六・五	六一三・七五	一四九・七二
四月	一一	五八・一	七五七・四八	二二七・一〇
五月	一〇	一〇五・八	八二七・二七	二一四・〇五
六月	一八	一五八・八	一四九三・一七	二四八・五
七月	一三	一六八・七	九八四・〇二	三七一・一六
八月	八	八八・〇	一〇二二・七四	二五七・九〇
九月	一五	二九二・二	一六一八・五五	二五三・七〇
十月	一六	一六二・六	一五五五・〇二	二二二・七九
十一月	一七	一六九・四	二二七九・二五	一八二・五五
十二月	一一	九七・〇	九五五・六六	一四三・二一
合計	一六〇	一、六一〇・五	一三、八〇八・五一	二、七八三・一八

此外大正八年中耕地一町歩ノ面積ニ降下セル鹽素量ハ三三・八二九・七五、無水硫酸量ハ一五五・三〇七・八瓦ナリトス

一六、各種磷酸化合物ノ試薬ニ對スル溶解度ニ關スル研究

目的 各種磷酸化合物所含磷酸中作物ニ利用サレ易キ磷酸量ヲ檢定セントスルニアリ

經過 二十五種ノ磷酸化合物ヲ諸種ノ試薬液ニテ處理シ各所含磷酸分ヲ定量セリ

成績 各種試薬ニ對スル各種磷酸鹽ノ溶解度ヲ檢シテ左ノ成績ヲ得タリ

磷酸鹽	各種試薬ニ溶解スル磷酸	
	全磷酸 %	對スル %
磷酸一石灰	五五・九五	一〇〇・〇〇
過磷酸石灰	二〇・六九	二〇・二一
同 (還元磷酸類)	一九・九二	一七・四九
同 (多キモノ)	一七・七六	一七・四九
同 (水ニテ洗滌シタルモノ)	〇・七八	〇・四〇
磷酸二石灰	四一・七二	一〇・〇〇
同	四一・七二	一〇・〇〇
磷酸三石灰	二六・一九	四・六四
同	二六・一九	四・六四
磷酸苦土	四一・〇二	八・三三
磷酸滿土	三六・五九	一三・九九
磷酸礬土	三六・三三	一三・七六
磷酸第一鐵	二八・八九	二六・四五
磷酸第二鐵	三四・七〇	二八・四五

昆 蟲 部

同 磷酸第二鐵	同 磷酸第一鐵	同 磷酸礬土	同 磷酸滿俺	同 磷酸苦土	同 磷酸三石灰	同 磷酸二石灰	同 磷酸二石灰	熱灼磷酸一石灰	蒸 製 骨 粉	「トーマス」磷肥	沈澱磷酸石灰	藍 鐵 礦	磷酸礬土礦(大塚)	大洋島磷礦
四八四三	三七〇〇	五〇八七	四六四一	六三〇九	四三〇六	五五三七	七三三三	二〇九〇	二〇九〇	一三七五	四三・九	一五・八	四一七二 三二五八	三六・二
一八五	〇・七	〇・五	一六五九	六七六	一四九九	三三三	四一五	五八七	八五八	二六・三	二六・三	〇・八	〇・三	一六六
三・八二	〇・四六	一・〇九	三五七五	一〇七二	三三〇八	六四四	五八二	二九・九	六二・六	六〇・九	六〇・九	二・四九	一・一七	三・八〇
二・三五三	七・二	三・五八	一九五三	二二五七	一五七六	九七六	六五九	六八九	二二・八	三六六八	三六六八	一四・七四	四・四四	二・四二
四六五一	一九四九	四三三九	四二〇六	一九九四	三六六〇	一七六三	九二二	二四八八	八三〇二	八〇三〇	八〇三〇	九・四七	一三〇一	六三二
四五五五	一五九五	三七五二	一四五四	九七六	二七四	三一九	七三四	一六	八・三	一五〇一	一五〇六	一五〇六	七〇九	〇・四七
九四〇七	四二・二	七・四	三・三三	一五四七	六三六	四〇八	二〇二九	九三六	五九二四	五七九二	五七九二	九・五	二・七五	一・三三
		痕跡	〇・五〇	〇・八二		〇・四六	二九一		痕跡				〇・六	〇・二〇
			一・〇八	一・三〇		〇・八三	四〇八			二・八九			〇・八	〇・六
九七〇	三・〇〇	七・四	二四六二	二九九二	四・〇八	一六〇一	三三五	一七四五	一一四三	四二二九	四二二九	一三七二	〇・八三	九八五
二二・一〇	八・一一	一四〇四	五三〇五	四七九二	九五〇〇	二八九二	四七〇	八八四九	八三・三	九三・九	九三・九	八九七九	二・五五	二五・五

一、昆蟲ノ越化性ニ關スル試驗
 目的 昆蟲ノ越化性ニ關スル特別ナル性質ヲ發見シ害蟲驅除ニ應用セントスルニアリ

經過及成績 稻ノ螟蛾ニ就テ試驗セシニ稻莖ヨリ得タル液汁ハ螟蛾ヲ誘引スルノ性アルヲ認メタリ
 尙ホ繼續調査中ナリ

二、日本産實蠅類ノ種類調査
 目的 現今世界ニ於ケル問題トナレル實蠅カ果シテ幾種本邦ニ産スルヤヲ調査シ且ツ相互ノ關係ヲ
 研究セントスルニアリ
 經過及成績 現ニ蜜柑蠅ノ研究及他ノ五新種ヲ歐文ニテ發表シタルモ以後ニ於テ發見シタル新種多
 キヲ以テ第二成績ヲ編纂發表セントス

三、食用及藥用昆蟲ニ關スル調査
 目的 新ラシキ食用及藥用昆蟲ヲ發見シ利用スヘキモノハ之カ利用ヲ獎勵シ且ツ從來ノ利用法ヲ改
 良シ一方ニ於テハ之カ捕獲ヲナシ害蟲驅除ニ應用セントスルニアリ
 經過及成績 既ニ第一回ノ報告ヲ完成シ更ニ補足スヘキ事項ヲ集メツ、アリ

四、梨果ノ害蟲調査
 目的 近年梨果ニ寄生スル梨姬心喰及梨癭蠅ノ害甚タ著シク各地梨園ノ收果大ニ減少スルノ傾向ア
 リ故ニ此等害蟲ノ形態及性質ヲ調査シ其ノ發生ヲ豫防驅除スル方法ヲ案出スルニアリ
 經過及成績 梨癭蠅ニ就キテハ年内數度ノ發生ヲ營ムコトヲ認メ且ツ其分布ヲ調査セリ尙ホ梨癭蠅

及姬心喰ノ越冬場所等ヲ繼續研究シ藥劑撒布及袋掛法等ニ依リ完全ニ豫防驅除ノ目的ヲ達シ得ル
ヤ否ヤニ就キ調査中ナリ

五、二化性螟蟲卵寄生蜂ノ種類及其寄生歩合分布狀態ノ調査

目的 二化性螟蟲卵寄生蜂ノ種類ハ各地ニ於テ異ナリ且ツ其寄生歩合モ年々多少ノ差違アルヲ以テ
各府縣立農事試驗場ト聯絡調査ヲ爲シ其分布狀態ヲ明カニスルト共ニ螟蟲ノ發生ヲ滅殺スルニ適
スル有力ナル卵寄生蜂ノ種類ヲ見出し之ヲ利用シテ其寄生歩合ヲ増加セシムルノ方法ヲ研究スル
ニアリ

經過 大正七年度ヨリ各府縣立農事試驗場ト聯絡調査ヲ始メ尙繼續調査中ナリ

成績 各府縣立農事試驗場ノ調査ニ據ルニ苗代田ニ於テハ概シテ卵寄生蜂ノ寄生歩合甚タ多ク黒及
赤兩卵蜂共ニ生存スル處ト黒卵蜂ノミ活動シ赤卵蜂ノ存在セサル處トアリテ分布狀態ニ大ナル差
異アルヲ認メタリ

六、二化性螟蟲寄生蜂種類調査

目的 螟蟲發生ノ多寡ハ寄生蜂ノ活動如何ニ依リ消長スルモノニシテ如何ナル程度迄各種寄生蜂ハ
活動ヲナスヤヲ調査シ且ツ其利用ヲ圖ルニアリ

經過 螟蟲ノ寄生蜂三種ヲ採集シタリ是等ノ寄生蜂ハ二化性螟蟲以外他ノ螟蟲類ニモ寄生スルモノ

ナルヤ否ヤ繼續研究中ナリ

成績 二化性螟蟲ノ越冬セルモノハ寄生蜂ノ爲メ殺滅セラル、歩合二七%ニ過キササル成績ヲ得タリ

七、三化性螟蟲及其類似螟蟲類調査

目的 三化性螟蟲性状ノ研究ニ依リ最善ノ驅除方法ヲ案出セントスルニアリ

經過及成績 三化性螟蟲モ或ル程度ニ於テハ二化性螟蟲ト同様ノ動作ヲナスヲ見出セリ又稻收穫期
ニ於テ藁稈内ニ棲息スルモノハ脱出移轉シ結繭越年スルノ性アルヲ認メタリ尙場合ニ依リテハ刈
株ヨリモ脱出スルモノナルヲ以テ冬期越年中及春期化蛹ノ時濕氣多ク蟲體浸水セラル、場合ハ悉
ク死滅スルコトヲ認メタリ

八、栗「タマムシ」飼育及驅除試驗

目的 栗「タマムシ」寄生ノ爲メ栗ノ生長ヲ害セラル、モノ多シ故ニ其經過習性ヲ研究シ之カ驅除豫
防ノ方法ヲ案出セントスルニアリ

經過 該害蟲ノ習性及發生時期ヲ明ニ調査シ了レリ尙年内ノ經過研究中ナリ

成績 該成蟲發生期ニ捕殺シ尙幹枝ニ薄キ「ペンキ」ヲ塗抹又ハ除蟲菊石油乳劑等ヲ撒布シ驅除豫防
ノ効アルヲ認メタリ

九、跳蟲類ノ調査

目的 各府縣ニ發生ノ跳蟲類ヲ採集シ特ニ農作物ヲ食害スルモノヲ調査研究スルニアリ
經過及成績 採集セル跳蟲類ヲ調査研究シ十數種ノ新種ヲ發見セリ

一〇、植物寄生線蟲類調査

目的 線蟲類ハ一種ニシテ其寄生植物多數ニ亘ルモノアリ又特種ノ植物ノミニ寄生スルモノアリ之
カ寄生ノ爲メ病徴ヲ呈スル狀況モ大ニ異ナレハ其習性ヲ闡明シ以テ其驅除豫防ノ方法ヲ案出セン
トスルニアリ

經過及成績 「ヘテロデラ、ラデシコラ」ハ五月ヨリ九月ノ間ニ於テ新生ノ幼根内ニ蠶入寄生シ根瘤
ヲ生スルモ他種ノ線蟲ニ就キテハ尙繼續研究中ナリ

一一、益蟲保護器ニ關スル研究

目的 螟蟲卵寄生蜂保護繁殖ノ爲メ保護器ヲ考案改良シ螟蟲卵寄生蜂ノ活動ヲ助勢シ其繁殖ヲ促シ
之ヲ廣ク分布セシメントスルニアリ

經過及成績 益蟲保護器内ニ石油等ノ油類ヲ使用スルハ其効力宜シカラサル爲メ他ノ粘著性濃厚物
即チ「トリートングル、ブード」ヲ使用シ其効果宜シキヲ認メタリ又保護器ノ構造ヲ改良シタル爲
メ前年度ノモノヨリ効果良好ナル成績ヲ得タリ

一二、驅除藥劑ニ關スル研究

目的 驅除劑ノ有効ナルモノヲ見出し農家一般ニ使用シ得ラル、モノヲ調製セントスルニアリ

經過及成績 南洋産魚藤^{アカツバ}ニテ「リュミ、ズ」其他蔬菜害虫、蛭蝨、蚜蟲等ノ驅除試驗ヲ施行シ「ユリ
ミ、ズ」ニ對シテハ魚藤ノ浸出液、蚜蟲類ニ對シテハ魚藤ノ「アルコール」浸出液（魚藤ノ十ダヲ
四十度ノ「アルコール」一合ニテ浸出ス）ヲ百倍乃至二百倍ニ稀釋シタルモノ、蛭蝨類ニ對シテハ
魚藤浸出液ニ少量ノ石鹼ヲ混合シタルモノヲ撒布シ驅除上有効ナルコトヲ認メタリ

一三、害虫及益蟲標本製作及驅除劑効力鑑定

本年度ニ於テ奈良、長野、静岡、愛知、三重諸縣等ニテ採集セル害虫標本約一千三百五十有餘
點ヲ製作整理シ被害果樹類模型標本三點ヲ製作セリ又公衆ノ依頼セル驅除劑八種ニ就キ効力ヲ鑑
定セリ

病 理 部

一、紫雲英菌核病菌ノ菌核浸水試驗

目的 紫雲英田ニ菌核病ヲ發生スレハ無數ノ菌核ヲ生ス此菌核ハ荒起シノ際地中ニ埋没セラレ水稻
栽培期間ニハ少クトモ五六個月間濕潤ナル土壤中又ハ水中ニアリ而モ尙ホ生活力ヲ保持スルヤ否
ヤハ本病豫防上重要ナル問題ナレハ之ヲ解決セントスルニアリ

經過 大正八年三月富山縣下ノ紫雲英田ニ於テ採集セシ菌核ヲ磁製「ワグネル」型植木鉢ノ土中ニ淺ク埋没シ五月一日ヨリ十月三十一日迄澁水シテ水田状態トナシ十一月一日ヨリ排水シテ菌核ノ發芽如何ヲ觀察セリ

成績 標準ノ浸水セサルモノハ大正九年三月上旬ヨリ發芽シテ盤果ヲ生シタルモ六個月間水田状態ノ地中ニ埋没セシモノハ全ク發芽セスシテ盡ク腐敗セリ是ヲ以テ見レハ六個月間水田中ニ埋没セシ菌核ハ病害作用ナキモノト認メテ誤リナカルヘク尙ホ試驗ヲ繼續シテ之ヲ確證セントス

二、紫雲英其他ノ雪腐ニ關スル調査

目的 北陸道及東北ノ雪國ニ於テ大雪ノ歲ニハ紫雲英、麥、桑、蘭等ノ腐敗スルコトアリテ之ヲ雪腐又ハ寒枯ト稱ス大正六七年北陸道一帶ノ紫雲英ハ七八割ノ大被害アリテ綠肥獎勵上ノ重大問題ナルモ其原因豫防ノ方法未タ明カナラサルヲ以テ之カ調査ヲナセリ

經過及成績 富山、長野、滋賀及福井縣ノ紫雲英栽培地ヲ踏査セシニ往々菌核病ノ發生セルヲ認メタリシカ稻刈取後紫雲英田ニ數回灌水スレハ凍害ヲ被ルコト少ク且ツ菌核病菌ノ盤果ノ發育ヲ妨ケ又胞子ノ飛散ヲ防クノ効アルカ如シ

三、實芭蕉萎縮病ニ關スル試驗

目的 東京府知事ノ委囑ニ依リ大正二年ニ萎縮病ノ爲メ全滅セシ東京府小笠原島實芭蕉栽培ノ復活

ヲ圖ラントスルニアリ

經過 同島ニ於テ病原、治療及ヒ肥料ニ關スル繼續試驗ヲ施行シ肥料三要素試驗ニアリテハ窒素多量區ハ最先(第二年目)ニ發病シテ本年度(第四年目)ニ至リテ全滅セリ加里多量區ハ最モ遅ク發病シ現今六割三步ノ健株ヲ殘存セリ其他ノ諸區ハ皆四割五歩乃至九割發病セリ肥料三要素適量試驗ニアリテハ窒素ハ三貫匁、磷酸ハ一貫匁、加里ハ八貫匁ヲ以テ適當量ト認メラル、ノ生育ヲ爲セリ應用的配合肥料試驗ニアリテハ堆肥ヲ配合セル各區ハ均シク優秀ノ生育ヲナシ就中堆肥、骨粉、木灰ヲ配合セル區ハ最良ノ成績ヲ示セリ

治療試驗ニアリテハ病株八十株ヲ移植シテ充分ニ堆肥及木灰ヲ施用シ其經過ヲ觀察セシニ本年度ニ至リ全治十八株、半治十四株ノ成績ヲ得タリシカ刈敷ヲ施サ、リシ爲メ土壤乾燥ニ失シテ苗ノ活着ヲ阻害シ從テ恢復株數ハ豫期ニ反シテ僅少ナリシ

成績 本年度迄ノ試驗ノ成績ニ徴スレハ本病ハ土壤中有機物ノ缺乏ニ由リテ起ル非寄生病ト認メラレ窒素ノ過剰ハ發病ノ最大誘因ニシテ試驗成績之ヲ證明スルノミナラス臺灣ニ於テ多量ノ土糞ヲ施用スレハ發病多シトノ事實ニ一致ス病株ハ之ニ充分ニ加里ト堆肥トヲ施シ保護宜シキヲ得レハ確實ニ恢復セシムルコトヲ得ヘシ

四、殺菌劑膠質銅液一名硫酸銅石鹼液ニ關スル試驗

目的 現今病害豫防ニ使用セラル、殺菌劑ハ主トシテ石灰「ホルドウ」液ナルモ原料ノ比較的高價ナルト粘着力及濕潤力ノ不完全及往々藥害アル等遺憾ノ點少カラサルヲ以テ膠質銅液一名硫酸銅石鹼液ヲ代用セシムルノ可否ヲ決定スルニアリ

經過及成績 硫酸銅ニ石鹼ヲ添加セル殺菌劑鈔ナカラスト雖モ左ニ記スルモノハ其主要ナルモノナリ

硫酸銅	石鹼	處方者名
0.5 %	1 %	Lavergne(1897)
2 %	3 %	Anillon et Geniarard(1898)
0.5 %	2 %	Vernorel et Dantony(1911)
0.5 %	1.5 %	Campbell(1912)
0.3 %	0.9 %	"
0.125 %	0.75 %	Pritchard and Clark(1919)

右殺菌劑ニ關スル研究日未タ淺クシテ配劑ノ割合及濃度ニハ一定ノ標準ナク殆ント適從スル所ヲ知ラス是レ一ハ石鹼ノ品質及ヒ撒布スヘキ植物ノ種類、時期等ニ依リテ斯ク差異ヲ生シタルモノナルヘシト雖モ硫酸銅對石鹼ノ割合ニ關スル研究未タ充分ナラサルニ職由スヘキヲ以テ先ツ之レニ關シ種々ノ試驗ヲ施行セシモ未タ其成績ヲ發表スルニ至ラス

園藝部

一、蔬菜品種ニ關スル試驗

目的 蔬菜類中優良種ヲ撰擇スルニアリ

經過及成績 内外蔬菜中優良ト認ムヘキ種類ヲ栽培シ收量及品質ヲ調査セシニ有望ナリト認ムル品種ハ左ノ如シ

- 茄子 眞黒、晩生由、矢原、支那大圓、三十三號(當部育成)
- 蕃茄 「スパイクスアリアナ」、「バーフェクション」、「テーブルクキーン」
- 蕃椒 伏見甘、鷹ノ爪、獅子
- 南瓜 居木橋、赤羽、菊座(埼玉)、鹿ヶ谷
- 馬鈴薯 「スノーフレック」、「アトリーハーベスト」、「アンクルサム」
- 里芋 赤芽、六月、八頭、河内(鳥取)
- 薑 大、中
- 菜豆 臺灣(「ケンタッキークワンダー」)、群房、「ボーレーデュモンドール」、黒、長鶉
- 豌豆 「フレンチシュガー」(臺灣大莢)、「アラスカ」、「ペールドノワイオン」、「ドベル

ニュー、廣島赤花
 蔓無、赤花
 「オクラ」 瓜哇、「ロンダホワイト」
 蘿蔔 宮重、大治、聖護院、白上り、島
 蕪菁 聖護院、据り、今市、谷口
 牛蒡 札幌、瀧ノ川
 胡蘿蔔 三寸、瀧ノ川
 葱 千住太葱、金澤葱、九條葱
 葱頭 大阪黄、「ブライズターカー」、「エローグロブダンバース」
 土當歸 江戸町早生、寒土當歸
 石刁柏 「ジャイアントフレンチ」
 甘藍 中野早生丸、豊田早生、「サクセツション」
 漬菜 直隸白菜、長崎白菜、愛知白菜、長梗白菜、青菜
 苺 「クラークスシードリング」、「ヴィクトリア」、「シャープブレス」
 促成用茄子 真黒

促成用胡瓜 馬込半白、針ヶ谷節成

促成用菜豆 黒、長鶉

促成用南瓜 早生菊座

促成用苺 「クラークスシードリング」

二、蔬菜栽培ニ關スル試験

目的 蔬菜栽培法ノ如何ハ其ノ品質及收量ニ大ナル關係ヲ及ホスモノナレハ如何ナル方法ヲ以テセハ最モ適當ナルカラ驗知セントスルニアリ

經過及成績 蔬菜ノ栽培ニ關シ施行セル試験ノ區別及成績ノ大要左ノ如シ

(一) 海水ノ施用 海水ノ主成分タル食鹽カ蔬菜ノ品質收量及病蟲害ニ及ホス効果ヲ知ランカ爲メ
 南瓜、茄子、「トマト」、甘藍、葱頭、菠薐草、石刁柏ニ就キ海水反當一千貫ヲ施用シタルニ茄子ニアリテハ青枯病ニ對スル抵抗力ヲ強クシ甘藍ニアリテハ腐敗病ヲ少クシ南瓜ニアリテハ莖葉ノ繁茂ヲ抑制シテ結實歩合ヲ多カラシムルノ傾向アルヲ認メタルモ尙繼續試験中ナリ

(二) 石刁柏雌雄株ノ比較 石刁柏ハ雌雄異株ナルヲ以テ雌雄株ニ依リ收量及品質ニ差異アルヤ否ヲ檢センカ爲メ大正五年ニ實生シタル苗ヨリ之レヲ分別シ大正七年ニ定植シタルカ大正八年始メテ採收期ニ達セリ第一年ノ成績ハ雌株ヨリ發生シタル嫩芽ハ肥大ニシテ收量多ク即チ雄株

- ハ反當五十六貫ナルニ對シ雌株ハ六十四貫ニ達スルコトヲ示セルモ尙試驗繼續中ナリ
- (三) 種苗ノ大小比較 種苗ノ大小ト收量トノ關係ヲ驗知センカ爲メ里芋及葱頭ニ就キテ種苗ヲ大小ニ區別シ播下シタルニ何レモ種苗ノ大ナルニ從ヒ收量増加セルモ種苗量ヲ要スルヨト多キヲ以テ之レカ經濟上ノ得失ニ關シ尙繼續試驗中ナリ
- (四) 馬鈴薯種薯ノ處理 馬鈴薯種薯ノ處理法ヲ異ニスルニ依リ收量ニ及ホス影響ヲ知ランカ爲メ種薯ノ大小ニ依リ切斷ノ方法ヲ異ニスルニ就キ試驗中ナリ
- (五) 秋馬鈴薯ノ催芽試驗 秋馬鈴薯ノ生育ヲ促進スル爲メ豫メ發芽セシメタルキノヲ以テスルノ可否ヲ驗シタルニ半日陰地ノ苗床ニ播種シ發芽後定植セルモノノ生育最モ佳良ナルヲ認メタリ
- (六) 葱苗ノ乾燥 九條葱ノ如キ葉葱ノ栽植ニ當リ其苗ヲ乾燥スルノ適否ヲ驗シタルニ九月播ノモノヲ翌年七月定植前十日間乾燥セシメタルモノノ收量最モ多キコトヲ認メタリ
- (七) 畦幅及株間ノ距離 葱、葱頭、甘藍、菠薐草ノ適當ナル畦幅及株間距離ヲ知ランカ爲メ畦幅及株間距離ヲ異ニシテ栽植シタルニ葱ニアリテハ株間四寸、二本植、甘藍ニアリテハ畦幅二尺五寸株間一尺二寸、菠薐草ニアリテハ撒播ノモノノ收量最モ多キヲ認メ葱頭ハ目下試驗中ニ屬ス
- (八) 播種期 葱頭、甘藍、菠薐草ニ就キ播種期ト採收期トノ關係ヲ驗知センカ爲メ九月中旬ヨリ十日乃至十五日毎ニ播下シ目下試驗中ナリ

- (九) 葎ノ傾斜面利用栽培 葎ヲ早熟セシムヘク傾斜面ヲ利用シテ栽培スルニ當リ適當ナル方法ヲ知ランカ爲メ四十五度ノ傾斜ヲ保テ南向ノ床ニ一年生ノ苗ト二年生ノ苗トヲ坪百株ノ割合ニ定植シ更ニ陽熱ノ吸收ヲ充分ナラシムル爲メ床面ニ大丸石、砂利、瓦片ヲ覆ヒタルニ一年生苗ニ砂利ヲ用ヒタルモノ最モ良ク繁茂シテ美果豐産ナリシモ瓦片ヲ用ヒタルモノハ乾燥シ易キ爲メ發育最モ不良ナルヲ認メタリ
- (一〇) 茄子ノ青枯病豫防 茄子ノ青枯病豫防上適當ナル藥劑ヲ知ランカ爲メ六年間同一圃地ニ於テ茄子ノ栽培ヲ繼續シ種々ノ藥劑ヲ施用シタルニ硫黃華十貫(反當)及石灰八十貫(反當)ヲ施シタルモノ其効能多キヲ認メタルモ被害尙尠ナカラサルヲ以テ尙試驗繼續中ナリ

三、茄子青枯病免疫性新品種育成試驗

目的 茄子青枯病ニ抵抗力強キ優良品種ヲ育成セントスルニアリ

經過及成績 河邊長茄子ハ其抵抗力最モ強キモ收量ノ少キコト及顯形長圓ニシテ一般ノ嗜好ニ適セサルヲ以テ此ノ缺點ヲ補フ爲メ大正七年本種ヲ母トシテ左記品種ヲ人工交配シ本年第二代ノ種子ヲ採收セリ

- 「アラツクビューチー」、眞黑茄子、晩生山茄子、蔓細千成茄子、開原白茄子、支那大圓茄子、三十三號茄子

右雜種中先ツ第一第二ノ代表者ニ就キ研究スル目的ニテ大正九年三月之ヲ播種シ今其生育中ナリ
四、果樹ノ品種ニ關スル試驗

目的 果樹ノ優良ナル品種ヲ選擇スルニアリ
經過及成績 和梨、洋梨、苹果、枇杷、桃、李、杏、梅、柿、柑橘、葡萄、無花果、栗ニ就キ内外
優良種ヲ栽培シ收量及品質ヲ調査シ有望ナリト認メタルモノハ年々種苗ヲ繁殖シ之レヲ各府縣ノ
團體及個人ニ配付セリ

五、果樹ノ剪定及整枝ニ關スル試驗

目的 果樹ノ剪定、整枝ノ時期及方法ニ依リ其生育及結果ニ及ホス影響ヲ驗知セントスルニアリ
經過及成績 果樹ノ剪定整枝ノ時期及方法ハ果樹ノ種類及品種竝ニ樹勢ノ強弱ニ依リテ之ヲ異ニセ
サルヘカラサルハ勿論ナルカ今日迄ニ得タル成績ニ據レハ大要左ノ如シ
夏期剪定ハ五月下旬ヨリ六月上旬迄ニ一回、七月中下旬ニ一回、八月下旬ヨリ九月上旬迄ニ一回
施スヲ常トシ摘心ハ和梨ハ四、五芽矮性砧ノ洋梨ハ七、八芽ニ摘心シ苹果及共砧ノ洋梨ハ夏期摘
心ヲ行ハサルヲ可トスルカ如シ又冬期剪定ハ樹ノ休眠期中即チ十二月下旬ヨリ一二月ノ間ニ行フ
ヲ可トスルカ如シ又果樹ノ剝皮ハ當場ノ如キ氣候溫暖濕潤ナル所ニアリテハ其効果著シカラサル
モ之レヲ行フノ時期ハ春期發芽前ヨリモ六月上中旬ヲ可トスルコトヲ認メタリ

六、果樹ノ砧木ニ關スル試驗

目的 各種果樹ニハ如何ナル砧木ヲ使用スルヲ有利トスルカヲ知ラントスルニアリ
經過及成績 桃、苹果、洋梨、櫻桃ノ共砧及矮生砧木、葡萄ノ免疫性砧木、柑橘特ニ「トムソンズ、
インブルード、ネーヴル」ニ關スル砧木ノ關係如何ヲ調査セリ而シテ其結果「トムソンズインブ
ルーヴドネーヴル」ニ關シテハ積殼砧トシタルモノハ生育甚タ不良ニシテ接着部下ノ樹皮枯損ス
ルニ至ルモ洋種甜橙實生苗又ハ柚等ヲ砧トスルトキハ生育甚タ可良ナルヲ認メタリ

七、接木ニ關スル試驗

目的 果樹類中比較的接着困難ナリト稱セラル、柿及栗接穂ノ採收時期、貯藏ノ方法竝ニ接木時期
ヲ知ラントスルニアリ
經過及成績 此等ノ樹種ニ對シ種々ノ接木法ヲ試ミタルニ切接ヨリモ芽接一般ニ成績可良ナルコト
ト接着部ヲ丁寧被包スルノ必要アルコトヲ認メ又時期ニ於テハ砧木ノ生育尙未タ止ラサルカ或ハ
既ニ生長ヲ始メタル時期ニ接梢ノ充實完全ニシテ其發育ノ未タ始マラサルモノヲ必要トスヘキヲ
認メタリ

八、果樹ノ肥料三要素試驗

目的 柿、和梨、苹果、柑橘ノ窒素、磷酸及加里ニ對スル關係如何ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ和梨及柑橘ハ無肥料區及無窒素區ニ著シク生育不良ナルヲ見ルモ苹果ニ於テハ當都所在地ニテハ其差異ヲ認ムルコト著シカラス

九、温州蜜柑ノ酸量及糖量ニ關スル試驗

目的 温州蜜柑ノ採收期ト酸量及糖量トノ關係如何ヲ知ラントスルニテリ

經過及成績 温州蜜柑ヲ時期ヲ異ニシテ採收シ之レヲ分析セシニ十月中旬ハ酸量多ク糖量少ク其後漸次熟期ノ進ムニ從ヒ酸量ヲ減シ糖量ヲ増シ十二月上旬ニ至リテハ糖量ノ極度ニ達シ其後ハ酸量減スルモ糖量ハ殆ント増減ナキヲ認メタリ

一〇、各種果樹ノ花芽生成ニ關スル研究

目的 各種果樹ノ花芽着生ノ時期ハ晩夏ヨリ初秋ノ間ニ在ルヲ常トスルモ其ノ生成ノ初期及終期並ニ生成ノ状態ニ關シテハ未タ研究サレタルモノナキヲ以テ之レカ研究ヲ行ヒ果樹ノ栽培上ニ資セントスルニテリ

經過及成績 大正五年度ヨリ梨及柿ニ就テ着手シ尙繼續研究中ニシテ未タ決定ノ域ニ達セズ

一一、柿ノ生理的落果ニ關スル研究

目的 柿ノ生理的落果ハ或ハ養分ノ供給過剰ノ爲ナリトシ或ハ此ニ反シテ或種養分ノ缺乏ノ爲メナリト稱セラル、モ受精不充分品種、降雨其地ノ氣候状態、果實ノ位置、土壤中水分ノ多少等ニ關

係アルモノ、如キヲ以テ此等ノ關係ヲ調査研究シ且ツ其豫防法ヲ講セントスルニテリ

經過及成績 本年度ニ於テ研究ヲ開始シタルモノニシテ未タ決定ノ域ニ達セズ

一二、梨ニ於ケル交配ノ果形ニ及ホス影響ノ有無ニ關スル研究

目的 交配ニヨリテ直チニ果形ニ變化ヲ及ホスコトナキハ從來ノ學說ナルモ往々ニシテ果形ニ變化ヲ及ホスカ如キ事實アルヲ以テ之レカ原因ヲ研究セントスルニテリ

經過及成績 和梨ニ就キ之カ研究ヲ開始シ尙繼續中ナルカ今日迄ノ成績ニテハ主トシテ生理的原因ニ由ルモノ、如シ

一三、果樹ノ授精能力及單爲結果 (Parthenocarp) ニ關スル研究

目的 果樹類中ニハ自花受精ノ困難ナルモノアリ又他花受精ノ不能ナルモノアリ或ハ單爲結果ヲナスモノアルヲ以テ種々ノ果樹ニ就キ受精能力及單爲結果ノ程度ヲ研究セントスルニテリ

經過及成績 本研究ハ柑橘、柿及梨ニ就テ數年前着手シ目下尙繼續中ニ屬シ未タ決定スルノ域ニ達セスト雖モ柑橘類ニ就キ今日迄ニ得タル所ヲ綜合スレハ左ノ如シ

柑橘類中旭柑、山吹柑、日向夏蜜柑等ハ自花不結果ノ部類ニ屬スルモノ、如ク他ノ品種ニ於テモ自花受精ヨリ他花受精ニ依ル方結果歩合多キモノナルコトヲ略知ルヲ得タリ尙九年母ト山吹柑トハ相互ニ受精不能 (Crosssterile) ノ關係アリ

柑橘類中温州、「ワシントンネーヴル」、「トムソンネーヴル」、無核紀州等ハ何レモ單爲結果ヲナスコト顯著ナルモノナリ然レトモ其ノ原因ニ就テハ各、異ナル所アルモノ、如シ温州ニテハ全然花粉ノ發芽能力ナキモノニアラサルモ其ノ能力ヲ有スル花粉極メテ少量ナリ加之一方雌器ノ受精機能ニ於テモ多少缺陷アルモノ、如シ「ワシントンネーヴル」、「トムソンネーヴル」ノ如キハ其花粉全ク發芽能力ヲ有セス且ツ温州ト同シク雌器ノ機能ニモ多少缺クル所アルモノ、如シ、無核紀州ノ場合ハ花粉ノ發育良好ナルモ雌器ノ機能不完全ニシテ全ク受粉作用ヲ營マサルモノナリ夫レ故ニ温州、「ワシントンネーヴル」、「トムソンネーヴル」ニ於テハ他ノ柑橘ノ花粉ヲ以テ交配セシムル場合ニハ有核ノ果實ヲ結實セシメ得ルモ無核紀州蜜柑ニ於テハ如何ナル柑橘ノ花粉ヲ以テスルモ受精作用行ハレス從テ有核ノ果實ハ絶對ニ生セサルモノナリ

一四、果樹ノ品種改良ニ關スル研究

目的 在來果樹中ヨリ優良ナル系統ヲ撰出シ或ハ人工交配ニヨリテ優良新種ヲ育成セントスルニアリ

經過及成績 系統分離ニ就テハ本年度ニ於テ各地方ヨリ温州蜜柑及梨苗木若クハ接穂ヲ取寄セ之レカ研究ニ着手シ又人工交配ニ就テハ數年來各種ノ果樹ニ就テ之ヲ行ヒ桃、葡萄及梨ニ於テ稍、優良ト認ムヘキモノヲ得ルニ至レリ何レモ尙繼續試驗中ナリ

一五、果實及蔬菜ノ貯藏及加工ニ關スル試驗

目的 果實及蔬菜ノ適當ナル加工及貯藏法ヲ驗知セントスルニアリ

經過及成績 各種果實ノ「シラップ」漬、「ジャム」、「マーマレード」、「蔬菜ノ水煮等ヲ試製シ加工ニ適スル品種ハ左記ノ如キモノヲ可ナリト認メタリ

「シラップ」漬 洋梨(「パトリレット」) 和梨(晚三吉等石細胞ノ少ナキモノ) 桃(「トライアンフ」)「ゴールドデンクリング」等主トシテ黃肉種ノ肉成分緊リ甘味強キモノ) 無花果(「ホワイトゼノア」等果皮ノ色淡キモノ)

「ジャム」 莓(「ビクトリヤ」) 無花果(「ホワイトゼノア」)

「マーマレード」 夏橙、臭橙、旭柑、「ブーケードフルール」就中目下最モ普通ニ栽培セラレ原料ヲ得ルニ容易ナル點ヨリ夏橙ヲ最モトス

水煮 豌豆(「アラスカ」)、「ペールドノワイヨン」等綠實小粒種)

果實「シラップ」漬ノ「シラップ」液ハ水一升ニ對シ砂糖二百五十ダヲ加ヘタルモノヲ適度トシ「マーマレード」ハ原料果ニ對シ砂糖七割又ハ等量トシ果皮ヲ約四分ノ一タケ混合シテ製スルヲ適當トスルモノ、如シ

又温州蜜柑ノ貯藏ニ關スル試驗ノ成績ニ據レハ採取及運搬ノ際最モ丁寧ニ取扱ヒタルモノ最モ良

ク貯藏ニ堪フルコトヲ示セリ尙其他貯藏ニ影響スヘキ事項ニ就テハ目下繼續試驗中ナリ

土 性 部

一、本邦耕地ノ代表的土壤ノ特性ニ關スル試驗

目的 本邦ニ於ケル農耕地代表的土壤ノ特性ヲ詳ニシ農作物ノ栽培及土地改良ノ基礎ヲ明ニセントスルニアリ

經過及成績 花崗岩砂質壤土(愛知)、富士燒石礫砂質壤土(靜岡)、安山岩壤質砂土(鹿兒島)、安山岩植質壤土(熊本)、火山岩層植土(秋田)、片麻岩礫質壤土(三重)、花崗片麻岩壤質植土(福島)、結晶片岩礫質壤土(德島)、秩父古生層下部礫植質壤土(和歌山)、秩父古生層輝岩砂質壤土(岩手)、中生層頁岩礫砂質壤土(熊本)、中生層砂岩礫質壤土(德島)、第三紀砂岩植質壤土(靜岡)、第三紀凝灰岩植土(秋田)、第三紀凝灰質頁岩植質壤土(宮城)、洪積層壤質砂土(京都)、洪積層腐植質植土(岩手)、洪積層腐植質植土(東京)、北上川沖積地植土(岩手)、御物川沖積地壤質植土(秋田)、阿武隈川沖積地植土(宮城)、利根川沖積地植土(埼玉)、木層川沖積地植質壤土(愛知)、淀川沖積地壤土(大阪)、吉野川沖積地壤質植土(德島)、筑後川沖積地植土(福岡)ヲ採集シ理化學的性質ヲ檢定シタル後之レヲ「ポット」ニ入レ年々水稻ヲ栽培シ稻ノ吸收セル肥料成分ヲ定量セリ本

試驗ハ今後數年間繼續施行スルニアラサレハ明確ナル成績ヲ得ルコト能ハス

二、盤層ノ調査

目的 施肥及耕作上缺點ナキモ米麥ノ生育及收穫不良ナル一原因ハ地下ニ盤層ノ成生アルコトヲ認メタルニ依リ廣ク之レヲ調査シ改良ノ方法ヲ講究セントスルニアリ

經過及成績 前年度以來京都府、鹿兒島、熊本、鳥取、滋賀及新潟縣下ニ於テ盤層ノ成生セル耕地尠ナカラサルコトヲ認メ各盤層ノ性質研究中ナリ

三、腐植質土壤中ノ磷酸ニ對スル加熱ノ作用ニ關スル研究

目的 腐植質土壤中所含ノ磷酸ハ殆ント作物ニ吸收利用セラレサルカ故ニ之ヲ日乾シ若シクハ火力ヲ加ヘテ熱スル時ハ有効態ニ變化セシメ得ヘキヤ否ヤヲ知ラントスルニアリ

經過 前年來鳥取及西ヶ原土壤ニ就キ大麥及水稻ヲ以テ「ポット」試驗ヲ行ヒ其生育及收量ヲ調査シ以テ實際上作物ニ對スル効能ノ如何ヲ檢スルト同時ニ亦其等ノ土壤ヲ分析シテ有効態磷酸ヲ調査セリ

成績 未タ試驗完了セサルヲ以テ明カナラスト雖モ本年度ニ於ケル「ポット」試驗ノ結果ニ依レハ西ヶ原土壤ニアリテハ前年ニ於ケルカ如ク加熱ノ爲メ米麥作共ニ著シク其收量ヲ増加セルモ鳥取土壤ニアリテハ稍、其趣ヲ異ニシ麥作ハ前年ノ如ク增收アリシモ稻作ハ殆ント其効果アルヲ認メサ

四、腐植質土壤ニ對スル各種磷肥ノ効驗比較試驗

目的 腐植質土壤ニ對シ最モ有効ニシテ且ツ最モ經濟的ナル磷酸肥料ヲ檢出セントスルニアリ

經過 鳥取及ヒ青森ノ腐植質土壤ニ就キ過磷酸石灰、磷酸曹達、遠益磷肥、沈澱磷酸石灰、骨粉、

磷礦粉等ヲ用ヒテ水稻及大麥ニ對スル肥効ヲ數年間繼續試驗セシカ本年度ニ於テハ其殘効ニ關シ

水稻ヲ以テ試驗ヲ行ヘリ

成績 兩土壤共ニ沈澱磷酸石灰ノ殘効最モ著シク磷酸曹達及ヒ過磷酸石灰ハ相伯仲シテ之ニ次キ遠

益磷肥、骨粉等ハ遙カニ劣レルヲ認メタリ

五、磷酸肥料ノ効果ト土壤ノ性質トノ關係試驗

目的 土壤中磷酸肥料ノ效果特ニ鈔キモノアルヲ以テ其原因ヲ明ニシ合理的肥料施用ノ方法ヲ案出

セントスルニアリ

經過 土壤ノ種類ニ依リ磷酸肥料ノ效果殊ニ鈔キハ土壤ノ理化學的性質ニ基クヘキモノナレハ精密

ニ此等ノ性質ヲ調査スルト同時ニ腐植質、鐵、礬土等ノ如キ膠質狀態ノ物質ト磷酸ノ吸着力トノ

關係ヲ研究スルコト必要ナルヲ以テ此等ノ調査研究ニ着手セリ

六、磷礦調査

目的 支那海南部ニ散在セル珊瑚島ニ於ケル磷礦石ヲ調査スルニアリ

經過及成績 支那海南部ニ散在セル諸島ニ産出スル磷礦石ヲ調査セシニ其種類頗ル多シト雖モ之レ

ヲ分類スレハ土狀磷礦、塊狀若クハ瘤塊狀磷礦、疊岩狀磷礦ナリトス此等ノ磷礦中土狀磷礦ハ褐

色若クハ黑褐色ノ土狀ヲナシ表層ニ位シ塊狀若クハ瘤塊狀磷礦ハ土狀磷礦層ノ下位ニ在リテ褐色

塊狀ヲナシテ存在ス疊岩狀磷礦ハ礦染シタル豆大ノ珊瑚粒ノ固結物ニシテ稍堅硬質ナリトス各種

磷礦中含磷量最モ多キモノハ塊狀磷礦ニシテ平均二〇%ヲ示シ土狀磷礦ハ平均一五%ヲ有シ疊岩

狀磷礦ハ平均一〇%ヲ含有スルニ過キス

七、土性調査

目的 耕地ノ理化學的性質ヲ檢シ農作物栽培上ニ資セントスルニアリ

經過及成績 石川、鳥取兩縣及東京府ノ依頼ニ依リ實地踏査ヲ爲シ耕地ノ表土及下層土ヲ檢シ必要

ナル土壤ヲ採集シ目下分析中ナリ

八、土性圖ノ作成

目的 土性調査ノ成績ヲ圖面ニ表示スルニアリ

經過及成績 和歌山縣土性圖ノ銅版彫刻ヲ了セリ

畿内支場

一、稻及麥類品種育成ノ基本調査

目的 米麥ノ品種改良上在來種ノ形態、生理竝ニ其生産能力ニ關スル調査ヲナシ人工交配ノ材料トスヘキ品種ヲ撰擇セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ水稻二十七品種、麥二十三品種ニ就キ苗ノ状態、出穂期、稈、葉、穂、穎花、穀粒等ノ特性ヲ調査シ次年度ニ於テ交配スヘキ材料ヲ撰拔セリ

二、稻及麥類ノ新品種育成試験

目的 人工交配ニ依リ優良ナル新品種ヲ育成セントスルニアリ

經過 本年度新ニ交配セルモノ竝ニ前年度ヨリノ繼續作業左ノ如シ

水稻

- (甲) 交配 畿内新品種一四、在來種一四、外國種一、通計二九品種ヲ材料トシテ六三組ノ人工交配ヲナス
- (乙) 雜種第一代 九品種間一七組
- (丙) 雜種第二代 一五組四〇族

- (丁) 雜種第三代 二組八二系統
- (戊) 雜種第四代 一二組二六〇系統

麥類

- (甲) 交配 大麥一二品種間二〇組、小麥一〇品種間一一組
- (乙) 雜種第一代
 - (イ) 大麥七組、小麥一三組
 - (ロ) 大麥二〇組、小麥一一組
- (丙) 雜種第二代
 - (イ) 大麥一一組三六族、小麥一六組五一族
 - (ロ) 大麥七組二三族、小麥七組一九族
- (丁) 雜種第三代
 - (イ) 大麥一組一八〇系統、小麥一組一三七系統
 - (ロ) 大麥二組四四六系統、小麥一組二〇八系統
- (戊) 雜種第四代
 - (イ) 大麥四組一五〇系統
 - (ロ) 大麥一組三七系統、小麥一組七三系統
- (己) 雜種第五代
 - (イ) 大麥五組三五四系統、小麥二組一一六系統
 - (ロ) 大麥二組一一系統
- (庚) 雜種第六代
 - (イ) 大麥二組二三一系統、小麥一九七系統

(ロ) 小麥一組五二系統

(辛) 雜種第七代 (ロ) 大麥一組五一系統

備考 (イ) ハ前年度ヨリ繼續試驗シ本年度ニ於テ調査ヲ了リタルモノ (ロ) ハ本年度試驗中ニ屬スルモノ

成績 以上各代中第三代以後ニ於テ有望ナル固定系統ハ新品種決定試驗ニ編入セリ而シテ其系統數ハ水稻ニアリテハ目下調査中ナレトモ麥ニアリテハ大麥五一系統小麥一九系統ナリ

三、水稻新品種ノ耐病試驗

目的 育成新品種ニ就キ稻熱病ニ對スル抵抗力強キモノヲ撰拔セントスルニアリ

經過 在來種中最モ耐病性弱キ神力ノ一系統ヲ標準トシ試驗品種數列毎ニ排列シ罹病ノ環境ヲ同一トナシ實用ニ耐ヘサル罹病程度ヲ示セルモノヲ除去シ次第ニ新品種ヲ添加セリ而シテ本年度試驗セル品種數ハ百十二品種ナリトス

成績 本試驗ハ大正七年ヨリ着手セルヲ以テ僅カニ二ケ年ノ成績ニ過キサレモ之レニ依リテ判スルニ神力×新關取、神力二號×山北坊主、龜治×神力、神力×晚白笹ノ系統中ニ稍、有望ナルモノアルヲ認メタリ

四、水稻ノ色素ニ關スル遺傳現象ノ研究

目的 水稻ノ莖葉ニ存在スル色素ノ遺傳現象ヲ研究シ品種ノ改良ニ資セントスルニアリ

經過 本年度栽培試驗セルモノ左ノ如シ

(一) 房吉、紫雜種第六代九四〇系

(二) 第六代戻雜種第一代一七八組

(三) 房吉、紫雜種第二代三族ト其兩親

(四) 萬年青、紫雜種第二代二組

(五) 大黒、紫雜種第二代一組

成績 大正五年ヨリ續行シ葉ニ於ケル花青素生成ニハ三箇以上遺傳單位ノ關涉セルコトヲ明カニシ且抽出無色系統ノ交種ニ依リテ花青素合成ヲ成就シ得タリト雖モ尙ホ其配色ニ關シテ研究中ナリ

五、稻及麥類ノ縞葉ニ關スル遺傳現象ノ研究

目的 稻及麥ニ於ケル縞葉竝ニ白子ノ遺傳現象ヲ研究シ品種改良上ニ資セントスルニアリ

經過 本年栽培セルモノ左ノ如シ

(甲) 水稻

(一) 蒐集シタル縞稻一六系統

(二) 縞稻、普通稻雜種第一代二七組及其兩親

(三) 同 第二代一組及其兩親

(乙) 麥

(一) 紅梅縞四八一系統外三系統

(二) 雜種第一代一二組

(三) 雜種第二代一八族

成績 本年ノ研究ニ據レハ縞葉遺傳ノ形質ニ多數ノ類別アルコトヲ認メ又水稻ニ於ケル或種類ノ縞ハ母方遺傳ヲナスコトヲ明ニセルモ尙ホ繼續研究中ナリ

六、稻及麥ノ不稔性ニ關スル研究

目的 稻及麥ニ於ケル不稔性ノ遺傳現象竝ニ其原因ヲ研究セントスルニアリ

經過 本年度ハ不稔性ノ遺傳現象ニ就キ研究センカ爲メ栽培セルモノ左ノ如シ

(甲) 水稻

(一) 荒木神力雜種第六代三一八系統及其兩親

(二) 同上前代ニ於ケル個體ノ存續一二三系統

(三) 黒子混濁稻雜種第三代一四九系統

(四) 荒木神力紫雜種第一代九組

(五) 其他不稔性ニ關シ多數ノ類別アルモノニ就キ前年度ヨリ蒐集續行セルモノ三六〇系統

(乙) 麥

(一) 一二五系統

(二) 雜種第一代四組

成績 不稔性ノ種類及遺傳ノ型式等ニ關シテハ稍々之ヲ明カニスルコトヲ得タルモ尙繼續研究中ナリ

七、水稻ノ變異ニ關スル研究

目的 水稻ノ變異ニ關シ其遺傳ノ型式ヲ研究シ品種改良上ニ資セントスルニアリ

經過 本年度栽培セルモノ左ノ如シ

(一) 相德變種六七八系統

(二) 相德變種ト他品種間ノ雜種第二代五組九族一六五系統及其兩親八四系統

成績 大正五年ヨリ繼續セルモノニシテ相德變種ニ於ケル稈長ノ變異ハ營養體分離ニ依ル一種ノ突然變異ナルコトヲ明カニセルモ尙其型式ニ關シ繼續研究中ナリ

八、米麥自然雜交ニ關スル研究

目的 米麥ノ異品種ヲ接近シテ栽培スル場合ニ起ル自然ノ雜交程度ニ關シ品種ト其環境トニ就キ研

究セントスルニアリ

經過及成績 水稻ハ紫稻、雄町ヲ材料トシテ種々ノ環境ニ於テ麥ハ三月稞、關取、改良麥數種ニ就

キ調査研究中ニシテ未タ決定スルニ至ラス

九、麥ノ「リンケージ」ニ關スル研究

目的 麥ノ「リンケージ」ニ關シテ研究ヲ行ヒ品種改良上ニ資セントスルニアリ

經過 本年度栽培セルモノ左ノ如シ

前年度ヨリ繼續シ調査チ了リタルモノ
本年度栽培調査中ノモノ

- (一) 兩親 二二族五八系統 一二族二五系統
- (二) 雜種第一代 一〇組二三族 一四組一六族
- (三) 雜種第一代戻雜種 三五組 二九組九五族
- (四) 雜種第二代 一一組六七族 八組三一族
- (五) 雜種第三代 六組一〇族九三七系統

成績 未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

一〇、棉ノ純系淘汰試驗

目的 在來種ハ甚シキ混型ナルヲ以テ系統淘汰ヲ行ヒ優良系統ヲ撰擇セントスルニアリ

經過 本年度栽培セルモノ左ノ如シ

第五年目 在來種三品種一九系統

第二年目 支那種三品種二七六系統

成績 在來種中ヨリ多數ノ純系ヲ得目下尙其收量及品質ニ就キ繼續試驗中ナリ

一一、甘藷品種比較試驗

目的 在來栽培セル、品種中優良ナルモノヲ撰擇セントスルニアリ

經過 前年ニ繼續シ本年度ニ於テハ八品種ニ就キ試驗ヲ行ヘリ

成績 三ヶ年以上ノ試驗成績ニ依リ優良ナル品種ノ平均反當收量及品質ヲ示セハ左ノ如シ

赤 藪	四八七、二	中	質
臺灣 種	三三九、三	下	
大 屋 小	四九五、六	中	
「ボ ケ」	三五一、五	中	
目 笑	五〇二、七	上	

源 氏

三五六、〇

中

六〇

一二、品種保存

目的 作物ノ品種ヲ保存シ品種改良ノ材料ニ供セントスルニアリ
經過及成績 本年栽培セル作物ノ種類及品種數左ノ如シ

保存品種數

水 稻	五三二
陸 稻	一〇〇
草 棉	二二
大 麥	二〇五
小 麥	二二〇
油 菜	七
甘 藷	八

一三、稻及麥類豐凶照照試驗

目的、經過及成績 本場種藝部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ノ成績ハ時々之レヲ報告セリ

一四、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ關スル調査

目的 大氣中ニ存在スル安母尼亞、硝酸、亞硝酸瓦斯ノ土壤ニ吸收セラルヘキ最大限度ヲ調査シ肥料施用上ノ參考ニ資セントスルニアリ

經過及成績 本場農藝化學部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ左ノ如シ

耕地一町歩ニ對スル量

安母尼亞態窒素

七、三〇九_x

硝酸態窒素

一一五

亞硝酸態窒素

三八三

合計

七、八〇七

一五、雨水ノ分析

目的 雨雪ニ依リテ耕地ニ降下スル化合窒素ノ量ヲ檢定シ肥料經濟上ノ資料ヲ得ントスルニアリ
經過及成績 本場農藝化學部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ左ノ如シ但シ一町歩ニ對スル量ヲ示ス

六一

九州支場

大正八年	降雨									
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月
日數	七	六	八	六	三	〇	七	五	六	五
降雨量	八三.二	七四.八	一〇七.五	二六.六	五.六	八七.七	一五.一	四八.八	二四.三	八七.七
窒素	安母尼亞態									
	二四.三	二五.八	二四.〇	二〇.七	三九.五	四三.〇	三八.四	八二.四	四四.三	三三.九
窒素	硝酸態									
	二六.二	二七.〇	二〇.二	一八.七	二七.五	二七.二	四八.一	一四.八	一〇.八	二〇.八
窒素	亞硝酸態									
	四.二	六.〇	七.二	九.八	一.四	一九.七	九.七	一.七	二.九	二.二
計	五〇.九	六〇.八	五二.二	三九.七	六八.二	七三.五	八七.七	三三.〇	四七.〇	五七.〇
鹽素	計									
	一〇.一	八.九	一三.五	一四.三	四.四	六.六	一〇.一	四.五	二.七	五.九
硫	計									
	三.八	三.三	六.八	八.八	四.四	九.八	六.〇	三.〇	一.四	三.〇

一、稻、麥類及甘藷ノ品種特性調査試験

目的 水陸稻、麥類及甘藷ノ在來品種ヲ蒐集シ其特性及收量ヲ調査シ品種改良上ノ材料タラシメン
トスルニアリ

經過 本年度ニ於テ栽培セル品種數左ノ如シ

水 稻	三〇五
陸 稻	一二六
小 麥	一〇八
稗 麥	八一
甘 藷	二一

二、九州各縣ニテ育成セラレタル優良品種價值査定試験

目的 九州各縣ニ於テ純系淘汰ニ依リ育成セル優良品種ヲ蒐集シ其價值ヲ査定シ以テ新品種育成ノ材料ニ供セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テ栽培セル品種ハ十五種ニシテ尙繼續試驗中ニ屬ス

三、稻及麥類人工交配試驗

目的 人工交配ニ依リ水陸稻及麥類ノ優良新品種ヲ育成シ併セテ諸形質ノ遺傳現象ヲ研究セントス
ルニアリ

經過 本年度ニ於テ栽培セル雜種各代ノ組合セ數若クハ系統數左ノ如シ

水稲

- (甲) 雜種第一代組合セ數 六組
- (乙) 同 第二代同 三組
- (丙) 同 第三代
 - 山北坊主×神力 二二七系統
 - 山北坊主×雄町 一八九系統
 - 神力×雄町 二五一系統
- (丁) 同 第四代神力×雄町 二五一系統
- (戊) 同 第五代神力×難不知 二四系統
- (己) 同 第六代
 - 晚白笹×相德 八〇系統
 - 撰立×晚白笹 三系統
- (庚) 同 第七代神力×晚白笹 二系統

陸稻

- (甲) 雜種第三代
 - 霧島×凱旋糯 一二四系統
 - 霧島×雄町 二二二系統
 - (乙) 同 第四代
 - 凱旋糯×野神力 六七系統
 - 野神力×早不知 四四系統
 - (丙) 同 第五代 岐阜糯×金子 九系統
- 小麥
- (甲) 雜種第一代 組合セ數 三組
 - (乙) 同 第二代同 三組
 - (丙) 同 第三代
 - 濠洲十三號×伊賀筑後 一七〇系統
 - 濠洲十三號×白「チャボ」 六五系統
 - (丁) 同 第四代 伊賀筑後×赤達摩 二七系統
- 稈麥
- (甲) 雜種第四代
 - 紅梅×米稈 一九系統
 - 小鯖×米稈 二五系統

成績 本試験ハ尙繼續中ニシテ未タ成績ヲ決定スルニ至ラス

四、水稻株間試験

目的 育成新品種ニ就キ一坪ノ栽植本數ヲ異ニスルニ依リ其特性ニ及ホス影響ヲ驗知セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テ著手セルモノニシテ尙繼續試験中ニ屬ス

五、連年無肥料栽培試験

目的 連年無肥料ニテ稻及麥ヲ栽植シ地力減耗ノ程度ヲ調査セントスルニアリ

經過及成績 明治卅九年以來施行セル所ニシテ本年度ノ成績ハ左ノ如シ

水稻收量 稈麥收量

稻刈株除去區

〇・八八五

〇・三九九

稻刈株殘留區

〇・九五三

〇・四三六

六、稻及麥類豐凶考照試験

目的、經過及成績 本場種藝部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ノ成績ハ時々之レヲ報告セリ

七、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ關スル調査

目的 大氣中ニ存在スル安母尼亞、硝酸、亞硝酸瓦斯ノ土壤ニ吸收セラルヘキ最大限度ヲ調査シ肥

料施用上ノ參考ニ資セントスルニアリ

經過及成績 本場農藝化學部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ左ノ如シ

耕地一町歩ニ對スル量

安母尼亞態窒素

二・八二八

硝酸態窒素

一四三

亞硝酸態窒素

一三四

合計

三・一〇五

八、雨水ノ分析

目的 雨雪ニ依リテ耕地ニ降下スル化合窒素ノ量ヲ檢定シ肥料經濟上ノ資料ヲ得ントスルニアリ
經過及成績 本場農藝化學部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ左ノ如シ

一	大正八年	月	降雨日數	降雨量	窒素量 (一町歩ニ對スル量)			
					安母尼亞態	硝酸態	亞硝酸態	計
		一	二	一四・二	一八七・五	四三・八	二二・七	二四四・〇

一 號 田	健 全 區		被 害 區	
	玄米ノ容量	葉ノ重量	玄米ノ容量	葉ノ重量
四三二五	一八二四四	三二五二	一五六一四	二九七〇
十	〇・八〇〇	〇・一〇〇	〇・七五〇	〇・一〇〇
十	〇・八五〇	〇・一〇〇	〇・七五〇	〇・一〇〇
九	〇・七〇〇	〇・一〇〇	〇・六〇〇	〇・一〇〇
八	〇・六〇〇	〇・一〇〇	〇・五〇〇	〇・一〇〇
七	〇・六〇〇	〇・一〇〇	〇・五〇〇	〇・一〇〇
六	〇・七〇〇	〇・一〇〇	〇・六〇〇	〇・一〇〇
五	〇・五〇〇	〇・一〇〇	〇・四〇〇	〇・一〇〇
四	〇・四〇〇	〇・一〇〇	〇・三〇〇	〇・一〇〇
三	〇・三〇〇	〇・一〇〇	〇・二〇〇	〇・一〇〇
二	〇・二〇〇	〇・一〇〇	〇・一〇〇	〇・一〇〇
一	〇・一〇〇	〇・一〇〇	〇・〇〇〇	〇・一〇〇
平	〇・八〇〇	〇・一〇〇	〇・七五〇	〇・一〇〇

一〇、稻白葉枯病ノ收量及ヒ品質ニ及ホス影響試驗
 目的 稻白葉枯病ニ依ル收量減少ノ程度及ヒ玄米ノ品質ニ及ホス影響ヲ知ラントスルニアリ
 經過 水稻神力種ヲ栽培セル水田ニ於テ被害ノ程度ヲ異ニセル六個所ヲ選定シ健全區及ヒ被害區ニ
 就キ其收量ヲ調査セリ
 成績 調査ノ成績ハ左ノ如シ
 一段歩當改算收量

一 號 田	健 全 區		被 害 區	
	玄米ノ容量	葉ノ重量	玄米ノ容量	葉ノ重量
六	三九八八	一六四六三	二七七五	一三〇八五
五	三九二〇	一五一八一	三五五三	一四九二二
四	三八四四	一四五八三	三一七五	一二七五五
三	三一八六	一二二八三	二七六四	一二三〇四
二	三五一五	一九一四一	二一六四	一五二二三
一	三七七九	一五九八二	二九三〇	一三九七〇
平	三三三三	一四四六三	二七三三	一三〇八五

同上減收歩合

一	二	三	四	五	六	平
玄米減收量	一・一六三	一・二二三	〇・三六七	〇・六六九	〇・四三二	〇・八四九
同上減收百分率	二六・九五	二八・八〇	九・三六	一七・四〇	一三・二四	二二・四六
葉減收量	二六・二〇	三三・七八	二五・九	一八・二八	〇・七九	三九〇八
同上減收百分率	一四・三六	二〇・五一	一七・〇	一一・五三	〇・六四	二〇・四一

以上ノ成績ニ依レハ被害區ハ健全區ニ比シ其減收少キハ九分多キハ三割八分ニシテ平均二割二分ヲ示ス

葉ノ減收量ハ少キハ六厘ヨリ多キハ二割五分ニシテ平均一割二分五厘ナリ
第一號田第六號田ノ玄米ニ就キ品質ヲ調査シタル成績ハ左ノ如シ

第一號田健全區 同上 被害區 第六號田健全區 同上 被害區	風	水	乾物				百分	中
			粗蛋白質	粗脂肪	粗纖維	可溶無氮素物		
第一號田健全區	二三九三	二二七	八五三九	二六二	三九七	三〇二	五〇〇	
同上 被害區	二二三九	二二〇	七〇〇〇	八四一	九五三	五一五	六九一	
第六號田健全區	二二三三	二二三	七八八〇	五六六	二四五	六五五	六五四	
同上 被害區	一九一九	二二三	六三三四	一〇六五	七八一	五九〇	一二三〇	
第一號田健全區	二二七	七二二	二二一	一〇七	七五六四	一二五	一二五	
同上 被害區	二二〇	九〇三	二四〇	一二二	七四一〇	一一五	一一五	
第六號田健全區	二二三	八一〇	二四三	一〇	七四九五	一一〇	一一〇	
同上 被害區	二二三	九〇三	二六〇	一二二	七三七一	一二二	一二二	

以上ノ成績ニ依レハ被害區ハ健全區ニ比シ千粒ノ重量輕ク且完全米少ク乳白米、銷米、青米、死米多キヲ見ル又風乾物ニ就キ行ヘル分析ノ結果ハ被害區ハ粗蛋白質、粗脂肪、粗纖維、粗灰分多ク可溶無氮素物少シ之ヲ要スルニ被害區ハ病害ノ爲メ葉ニ於ケル同代作用妨害セラレ充實不充分

ナルヲ示スモノナリ

一一、稻白葉枯病ニ關スル試驗

目的 九州地方ニ流行シツ、アル稻白葉枯病ノ病原體及傳染ニ關スル事項ヲ明カニシ之レカ救治法ヲ求メントスルニアリ

經過 本試驗ハ大正四年ヨリ繼續施行セルモノニシテ本年度ニ於テハ前年接種試驗ニ依リ病原ト認メタル細菌ヲ培養シ其ノ感染力、生理的性質及土壤中ニ於ケル生存力等ヲ調査セリ

成績 本試驗ノ成績ニ依レハ病原菌ハ黃色細菌ニシテ植物病原細菌中之ニ類似ノモノナク特異性ヲ有ス而シテ本病原菌ヲ他ノ禾本科植物ニ接種シ其ノ感染力ノ有無ヲ試驗セルニ麥ヲ除クノ外他植物ヲ侵スコトナキカ如シ又大正八年十一月ヨリ圃場ニ一定ノ裝置ヲナシ其ノ内ニ病原細菌ヲ保存シ一箇月毎ニ其生活力ヲ調査セシニ大正九年三月中旬迄ハ生活力ヲ保有セルコトヲ認メタリ

一二、大麥稈麥葉枯病ニ關スル試驗

目的 九州各地方ニ發生スル大麥斑葉病(ヘルミント、スポリユーム、テレス)ニ類似セル病害ノ原因及防除法ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 本試驗ハ大正元年ヨリ繼續セルモノニシテ本年度ニ於テハ稈麥十三種ヲ栽培シ肥料ヲ異ニシ三區ニ分チテ其發病狀況ヲ調査中ナリ又本病原菌ニ關シテハ黃色ニ變セル病患部ノ中ニ細

菌體ノ如キ顆粒狀ノモノヲ認メ得ルモ未タ之レヲ明ニスルノ域ニ達セス

一三、柑橘ノ「ゴム」病ニ關スル試驗

目的 宮崎縣下ニ發生セル柑橘「ゴム」病ノ原因及其救治策ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 實地ノ調査ニ依レハ本病ハ土地ノ不適當ナル場合殊ニ低地ニ於テ發生スルモノ、如キ

モ其病原菌ハ未タ明カナラス尙繼續研究中ナリ

一四、茄子、蕃茄ノ連作ニ關スル試驗

目的 茄子、蕃茄ヲ連作スルトキハ青枯病ニ罹リ易キヲ以テ之レカ豫防法ヲ知ラントスルニアリ

經過 本試驗ハ大正元年以來繼續試驗セルモノニシテ本年度ニ於テハ各種ノ藥劑ニテ土地ヲ消毒シ

テ各區三十本ツ、移植シ其枯死歩合ヲ調査セリ

成績 無豫防區ハ全部枯死セルモ消毒區ハ一部分健全ニ生育セルコトヲ認メタリ今其枯死歩合ヲ示

セハ左ノ如シ

試驗ノ區別	本數	健全數	枯死數	枯死歩合
石炭酸消毒區	三〇 [*]	一七 [*]	一三 [*]	四三%
「フォルマリン」消毒區	三〇	九	二一	七〇
昇汞千倍液消毒區	三〇	一六	一四	四七

無豫防區

三〇

〇

三〇

一〇〇

陸羽支場

一、稻麥及豆類ノ品種試驗

目的 本試驗ハ稻、麥及豆類ノ優良ナル品種ヲ撰定シ品種改良ノ材料ニ供セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テ栽培セル作物ノ種類及品種數左ノ如シ

水稻	一六三
小麥	二五
大豆	一三七
小豆	七八

本試驗ハ尙繼續中ニ屬ス

二、甘藷ノ栽培ニ關スル試驗

目的 本試驗ハ東北地方ニ適スヘキ甘藷ノ品種ヲ撰定シ又其移植期ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ支場内及刈和野試驗地(原野開墾地)ニ於テ試驗ヲ行ヘリ試驗ハ十一品

種ノ收量比較及移植期ノ早晚ニ依ル收量ノ比較ニシテ其成績ハ左ノ如シ

品種收量比較

品種名	場内試験地	刈和野試験地
蔓四十日	六七七	七一五
立四十日	六六四	五九一
鹿兒島	四三六	四六〇
千葉赤	四二五	五〇二
薄赤	四〇九	三七九
紅赤	三六七	六一四
花魁	三五三	六一五
金時	二九八	六一一
源氏	二四四	七六四

移植期ニ依ル收量ノ比較

移植期	場内試験地	刈和野試験地
五月十日	三三六	—

五月二十日	三六七	五七八
五月三十日	四二四	七七六
六月十日	—	六七二

三、稻及麥類人工交配試験

目的 人工交配ニ依リ水稻及麥類ノ優良品種ヲ育成シ併セテ諸形質ノ遺傳現象ヲ研究セントスルニアリ

經過 本年度ニ於テ栽培セル雜種各代ノ組合セ數若クハ系統數左ノ如シ

水稻

- (甲) 雜種第一代 組合セ數 五組
- (乙) 同 第二代 組合セ一〇組 三五〇系統
- (丙) 同 第三代 同 八組 八〇〇系統
- (丁) 自然雜種(母豐國種) 五三系統

大麥

- 雜種第一代 組合セ數 二七組

大豆

- (甲) 雜種第一代 組合七數 一一組
 - (乙) 同 第二代 同 八組
 - (丙) 同 第三代 三一系統
- 小豆

雜種第一代 組合七數 五三組

成績 本試験ハ尙繼續施行中ニシテ未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

四、水稻ノ諸形質ノ遺傳ニ關スル研究

目的 水稻ノ諸形質ノ遺傳現象ヲ明ニシ品種改良上ニ資セントスルニアリ

經過 本年度試験ヲ施行セルモノ左ノ如シ

(イ) 穂長ノ遺傳現象 龜ノ尾×赤毛

(ロ) 芒、稈及柱頭ノ色ノ遺傳現象 東郷×長者坊主

(ハ) 芒長ノ遺傳現象 大和力×龜ノ尾

成績 本試験ハ尙繼續試験中ニシテ未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

五、赤米ノ遺傳現象ニ關スル研究

目的 赤米ノ遺傳現象ヲ研究セントスルニアリ

經過 前年來繼續セル所ニシテ本年度ニ於テハ雜種第二代三十九系統同第五代一系統ヲ栽培試験セ

リ

成績 赤米ヲ生スヘキ遺傳因子ハ少クモ二個ニシテ其一ヲ缺クトキハ玄米ハ黄色ヲ呈スルコトヲ確

認セリ

六、水稻ノ紫色花色素ノ遺傳現象ニ關スル研究

目的 水稻紫色花色素ノ遺傳現象ヲ研究セントスルニアリ

經過 前年來繼續セル所ニシテ本年度ニ於テハ布哇×紫早生ノ雜種第三代二百三十三系統及赤籼×

紫早生雜種第三代八十九系統ニ就キテ研究ヲ行ヘリ

成績 水稻ノ葉鞘、葉身、葉舌、稈先及雌藥ノ柱頭ニ紫色ヲ呈スル場合ニハ少クモ三個ノ遺傳因子

存在シ此等因子一ノニ依リ柱頭ニ紫色ヲ呈シ他ノ一因子加ハルトキハ稈先及葉鞘紫色トナリ三因

子ノ存在ニ依リ葉舌葉身ニ完全ナル紫色ヲ現ハスコトヲ確認セリ又綠色稻ナル布哇種ハ抑制因子

ノ存在スルニ依リ紫色ヲ呈セサルコトヲ認メタリ

七、矮生稻ノ發生ニ關スル研究

目的 矮生ナル盆栽稻及大黒稻發生ノ原因ヲ研究セントスルニアリ

經過 盆栽稻及大黒稻ノ交配ニ依リ普通稻ヲ生スルノ事實ヨリシテ兩種ノ雜種ニ依リ遺傳現象ヲ數

年來研究シ本年度ニ於テハ第三代四百八十系ヲ栽培調査シタリ

成績 本研究ノ成績ニ據レハ盆栽稻及大黒稻ハ普通稻ニ比シ各一部ノ遺傳因子ヲ缺ケルモノニシテ普通稻カ右ノ一因子ヲ失ヘハ盆栽稻トナリ他ノ一因子ヲ失ヘハ大黒稻トナル而シテ兩因子ヲ共ニ失フトキハ一層矯生ナル稻ヲ生スルコトヲ認メタリ

八、水稻ノ不稔性ニ關スル試驗

目的 水稻ノ不稔性ニ關シ遺傳的現象ヲ明ニセントスルニアリ

經過 本試驗ハ前年度ヨリ引續キ施行シ完全不稔性ト完全無芒、葉身稔轉ノ三形質ノ相關遺傳竝ニ非相關遺傳ニ關シ特異ノ分離現象ヲ調査センカ爲本年度ニ於テハ左記ノ系統ニ就キ試驗ヲ行ヘリ

本 試 驗

九五七系

關係人工雜種第二年目

一三一系

同 第三年目

一〇三系

成績 未タ決定スルノ域ニ達セス

九、水稻特性ノ變異ニ關スル研究

目的 水稻ノ出穂期、草丈、莖數、穗長、穗重等ノ變異ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ赤毛及關山二種ニ就キ調査ヲ行ヘリト雖モ尙繼續試驗中ニシテ未タ成

續ラ決定スルノ域ニ達セス

一〇、倒伏時期ノ收量竝ニ品質ニ及ホス影響調査

目的 水稻出穂後倒伏ノ時期ニ依リ其收量品質ニ及ホス影響ヲ知ラントスルニアリ
經過及成績 本試驗ハ左記ノ區別ニ依リテ之ヲ行ヘリ

	玄米品位	同剛度
八月二十五日倒伏セシム	五〇	六五
八月三十日同 上	七〇	六五
九月 四 日同 上	八〇	六五
九月 九 日同 上	八〇	七二
九月十四日同 上	九〇	七四
標準倒伏セシメス	一〇〇	七七

而シテ試驗ノ成績ハ倒伏時期ノ早キニ從ヒ玄米收量遞減スルノ傾向アルヲ認メタリ

一一、日照ノ稻ノ生育ニ及ホス關係

目的 本試驗ハ稻ノ生育各期ニ於ケル日照ノ影響ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 稻生育ノ各期ニ於テ人工ニテ日光ヲ遮斷シテ其生育及收量ヲ調査セルモ未タ成績ヲ決

定スルノ域ニ達セス

一二、水稻葉面積ト生産力トノ關係試驗

目的 水稻葉面積ノ大小ト收量トヲ調査シ兩者ノ關係ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ水稻十八種ニ就キ試驗ヲ施行セルモ未タ決定スルニ至ラス

一三、稻及麥類豊凶考照試驗

目的、經過及成績 本場種藝部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ノ成績ハ時々之レヲ報告セリ

一四、大豆ノ粒ノ大サノ遺傳ニ關スル試驗

目的 普通大豆ニ於ケル大粒種ト小粒種トノ雜種ニアリテハ第一年目ノ植物ニ結實セル子實ノ大サハ兩親ノ略ホ中間ナレトモ普通大豆ト野生「マメ」トノ雜種ニテハ前ノ場合ト其趣ヲ異ニシ著シク

一方ニ偏スルヲ見ル本試驗ハ此等ノ遺傳的差異ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於ケル栽培系統ハ左ノ如シ

人工雜種 第四年目 一組 四五系統

同 第三年目 二組 一一八系統

同 第二年目 二組

成績 尙繼續中ニシテ未タ成績ヲ決定スルニ至ラス

一五、大豆ノ不結實性ニ關スル試驗

目的 大豆ノ不結實性ニ就キ遺傳現象ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 前年度ニ繼續シ一九〇系ヲ栽培セリ尙繼續試驗ヲ要シ未タ成績ヲ決定スルニ至ラス

一六、紫蘇、荳胡麻ニ關スル雜種試驗

目的 花青素、香氣等ニ關スル遺傳現象ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ雜種第三代ヲ栽培セリ尙繼續試驗中ニシテ未タ成績ヲ決定スルニ至ラス

一七、「ヤマシソ」ニ關スル雜種試驗

目的 内務省ノ囑託ヲ受ケ當支場ニ於テ「ヤマシソ」ト「オホヤマシソ」トノ種間交配ヲ行ヒ優良ナル品種ヲ育成セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ雜種第三代九〇系ヲ栽培シ其形態上ノ分離現象ヲ調査シ且ツ其一部ヲ

以テ「チモール」含有量ノ定量分析ヲ行ヒタリ而シテ試驗ノ成績ニ據レハ種間雜種ハ種々ナル異型ヲ生シタルノミナラス「チモール」含有量ニ於テモ著シキ差異アルコトヲ認メタリ

一八、原野ニ於ケル施肥試驗

目的 原野ニ於ケル肥料施用ノ効果ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 原野ニ過磷酸石灰、硫酸「アンモニア」、智利硝石、大豆粕、石灰等ヲ施用シタルニ之レヲ施用セサルモノニ比シ過磷酸石灰區ハ草生最モ良好ニシテ硫酸「アンモニア」區、智利硝石區、石灰區等之レニ次キ大豆粕區最モ劣レルモノ、如シ殊ニ荳科植物ハ過磷酸石灰區ニ於テ非常ナル速度ヲ以テ年々生育繁茂シ、石灰區ハ之レヲ過磷酸石灰區ニ比スレハ著シク劣レルモ亦年々増殖シ其他ノ各區ハ生育極メテ不良ナルヲ見ル

一九、肥料ト牧草トノ關係試驗

目的 原野ノ開墾地ニ牧草ヲ混播(禾本科、荳科)栽培スルニ當リ施肥ノ方法ヲ知ラントスルニアリ
經過及成績 初年ハ第一區厩肥單用ノモノ收量最モ少ク第二區厩肥ニ石灰ヲ加用シタルモノ之レニ次キ第三區、第一區ノ厩肥二分ノ一ニ代フルニ硫酸「アンモニア」ヲ以テシタルモノ(窒素ニテ計算ス)其次ニ位シ第四區、第三區ニ石灰ヲ加用シタルモノ最モ收量多カリ然ルニ年々經ルニ從ヒ漸次草勢變換シテ第一區收量最モ少ク第三區第四區第一區ノ順序ニテ増加シ大正八年ニ至リテハ第一區第三區收量ハ殆ント相伯仲シ第四區之ニ次キ第二區ノ收量最多トナルニ至レリ併シ荳科植物ノ生育ハ第二區最盛ニシテ第一區ハ非常ニ劣リ第三第四ノ兩區ハ更ニ微々タルモノアルヲ認メタリ

二〇、野草採草回数ニ關スル試驗

目的 野草ノ採草回数即チ毎ニテ年間ニ野草ヲ刈取ル回数ハ草勢ノ盛衰、草種ノ變遷等ニ如何ナル影響ヲ及ホスヤラ知ラントスルニアリ

經過及成績 標準調査ニ比スレハ收量ニ於テ第一隔年一回刈區ハ年々殆ント増減ナク第二隔年一回刈區ハ約三分ノ一、第三隔年二回刈區、第四隔年三回刈區ハ共ニ約四分ノ一ニ減スルニ至レリ然ルニ收量ノ累計ハ之レニ反シ採草回数多キモノ大ナリトス又草種ノ變遷ハ目下調査中ニ屬ス

二一、火入試驗

目的 春季原野枯草ノ乾燥セルニ際シ火入ヲ行フトキハ野草ノ收量、草種ノ變遷及土壤ニ如何ナル影響ヲ及ホスヤラ調査セントスルニアリ

經過及成績 標準區ト火入區トハ野草ノ收量ニ於テハ殆ント優劣ナキモノ、如ク火入區ハ標準區ニ比スレハ草生粗トナルカ如ク之レニ反シテ草丈高キカ如キ觀アリ草種變遷ノ狀況竝ニ土壤ニ及ホス影響等ニ就テハ尙調査中ニ屬ス

二二、「コマツナギ」ニ關スル試驗

目的 從來ノ試驗成績ニ依リ「コマツナギ」ハ荳科植物中最モ有望ナルコトヲ知得シタルヲ以テ之レノ栽培法ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 本年度施行シタル試驗ハ左ノ如シ

- (イ) 刈取時期 開花初、開花盛、結實初等ノ時期ニ刈取ルトキハ之レカ生育殆ント盛衰ナシト雖モ落花期ニ刈取ルトキハ漸次衰退シテ收量ヲ減スルモノ、如シ
- (ロ) 刈取期ト刈取ノ高サ
- (ハ) 三要素試驗
- (ニ) 肥料試驗

以上三試驗ハ何レモ繼續試驗中ニシテ未タ其成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

二三、三要素ト野草トノ關係試驗

目的 原野ニ三要素ヲ施用スルトキハ野草ノ生育ニ如何ナル影響アルヤヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 磷酸ノ効果最モ大ニシテ之レニ次ク窒素トス而シテ無磷酸區ハ殆ント荳科植物ヲ見ルコトナキモ磷酸區ハ同植物ノ發生良ク年ヲ徑ルニ從ヒ漸次繁茂シツ、アリ

二四、原野草勢ト水溫並ニ光線トノ關係試驗

目的 本試驗ハ原野草ニ及ホス水濕、光線等ノ影響ヲ調査セントスルニアリ

經過及成績 (一) 毎日水一耗ヲ灌溉セルモノハ標準區ニ比シ約二割五分 (二) 粗ニ編ミタル葦簀ヲ以テ覆ヒ日光ヲ遮斷シタルモノハ標準區ニ比シ約三割五分 (三) 粗ニ編ミタル葦簀ヲ以テ覆ヒ日光ヲ遮

斷シ且ツ毎日水一耗ヲ灌溉シタルモノハ標準區ニ比シ約五割ノ草量ヲ増加セリ又以上ノ方法ヲ刈草後ニ施行セルモノハ之レカ草量増加率著シク減少シ(一)二約一割(三)ハ一割六分ニ過キサリシ尙草種ノ變遷等ニ就テハ調査中ニ屬ス

二五、生産要素ノ效果ニ關スル試驗

目的 本試驗ハ一要素ノ效果ハ施用量ニ依リ如何ニ變化スルヤ又他ノ要素ノ添加ニ依リ如何ニ變化スルヤ此間ノ一般的法則ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 腐植質ノ含量ヲ變化セシムル目的ニテ陸羽支場表土及心土ヲ混和シ六種ノ土壤ヲ作り窒素ヲ種々ノ分量ニ施給シ大正七年度ヨリ「ポット」試驗ヲ行ヒ本年度ニ於テハ窒素及磷酸ヲ諸種ノ分量ニ施給シ蕎麥及蕎麥ニ就キ試驗ヲ行ヒタリ本試驗ノ收穫物ハ目下分析調査中ニ屬ス

二六、堆肥中ノ三要素肥効試驗

目的 本試驗ハ水稻ニ對スル堆肥ノ含有スル三要素ノ肥効ヲ査定セントスルニアリ

經過及成績 大正七年來方二尺ノ木框ニテ繼續セルモノニシテ本年度ノ收穫物ハ分析調査中ニ屬スルモ既ニ得タル成績ニ據レハ堆肥中ノ窒素、磷酸、加里ハ水稻ニ對シ何レモ相當ノ肥効アルヲ認め又堆肥ニ窒素、磷酸又ハ加里ノ各一要素ヲ添加シタル成績ニ據レハ陸羽支場ノ土壤ニアリテハ窒素ヲ添加シタル場合ハ稻ノ全收穫物並ニ粒量著シク増加スルコトヲ認メタリ

二七、石灰連用試験

目的 本試験ハ石灰連用ノ土壤ニ及ホス關係ヲ査定セントスルニテアリ
 經過及成績 堆肥區及化學肥料區ニ就キ石灰ヲ種々ノ分量ニ施給シ夫正七年來方三尺ノ米櫃ヲ用ヒ
 水稻ヲ栽培セリ本試験ハ尙繼續施行ヲ要シ未タ成績ヲ決定スルノ域ニ達セス

二八、堆肥ノ冬季積雪上放置ト其窒素ノ損失ニ關スル試験

目的 東北地方ニ於テハ冬季農閑期ニ於テ堆肥ヲ積雪上ニ運搬放置スルヲ普通トスルヲ以テ之レニ
 ヨリ堆肥ノ窒素ヲ損失スルコトナキヤラ查駁セントスルニテアリ

經過及成績 大正六年以來圃場試験ヲ行ヒタリシカ本年度ヲ以テ試験ヲ終了ラ告ケタリ其ノ成績ニ
 據レバ堆肥ヲ積雪上ニ放置スルモ窒素ノ損失ナキモノ、如シ即チ三年平均收量左表ノ如シ

一反步當リ全收穫物 同上収收量

新鮮厩肥

標準 二二・九三七
 雪上運搬 二二・四五二

腐熟厩肥

標準 二二・九二三
 雪上運搬 二二・八四八

二九、稻ノ品種ト窒素施用量トノ關係

目的 本試験ハ窒素ノ効果ハ施用量ニ依リテ如何ニ變化スルヤ又此等ノ變化ハ稻ノ品種ニ依リ差異
 ナキヤ否ニ就キ其關係ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 數年間無肥料地ノ土壤ヲ用ヒ磷酸及加里ヲ充分ニ施給シ窒素ヲ種々ノ分量ニテ施シ代
 表的數品種ノ水稻ニ就キ大正六年以來「ポット」試験ヲ行ヒツ、アレトモ未タ其成績ヲ決定スルノ
 域ニ達セス

三〇、玄米ト白米ノ消化率査定試験

目的 本試験ハ玄米及白米飯ノ消化率ヲ査定セントスルニアリ
 經過及成績 玄米及白米ヲ人夫ニ食セシメ消化試験ヲ行ヒタルニ差ヲ成績ヲ得タリ(消化率%)

	玄米	白米
固形物	九一・四	九七・六
有機物	九二・二	九七・八
粗蛋白質	五八・六	七六・〇
純蛋白質	六二・二	七七・五
可溶無窒素物	九八・三	九九・七
粗脂肪	一三・五	二八・五

組織維

六九・二

九六・八

右ハ一回ノ試験成績ニ過キササルヲ以テ更ニ第二回試験ヲ行ヒタルモ目下分析調査中ナリ

三一、刈取期ヲ異ニセル野草ノ消化試験

目的 春刈、夏刈及秋刈ノ野草ニ就キ消化率ヲ知ラントスルニアリ

經過及成績 秋田種馬所ノ供給ニ係ル材料ニ依リ綿羊ニ就キ消化試験ヲ行ヒ試験略完了セルヲ以テ之レヲ編纂報告セントス

三二、大氣中ヨリ土壤ノ吸收スル窒素化合物ノ最大限度ニ關スル調査

目的 大氣中ニ存在スル安母尼亞、硝酸、亞硝酸瓦斯ノ土壤ニ吸收セラルヘキ最大限度ヲ調査シ肥料施用上ノ參考ニ資セントスルニアリ

經過及成績 本場農藝化學部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ左ノ如シ

耕地一町歩ニ對スル瓦量

安母尼亞態窒素 五・七〇六_瓦

硝酸態窒素 〇・一九四

亞硝酸態窒素 〇・三四五

合計

六六・二四五

三三、雨水ノ分析

目的 雨雪ニ依リテ耕地ニ降下スル化合窒素ノ量ヲ檢定シ肥料經濟上ノ資料ヲ得ントスルニアリ
經過及成績 本場農藝化學部ニ於テ施行セルト同様ノ方法ニ依リ調査セルモノニシテ本年度ニ於ケル成績ハ左ノ如シ

雨 雪	降 雨 日 數	降 雨 量	窒 素 量 (一町歩ニ對スル量)			
			ア ン モ ニ ア 態	硝 酸 態	亞 硝 酸 態	計
一	二七	一六一・〇 _瓦	四八三・〇 _瓦	一〇八三・七 _瓦	一八二・〇 _瓦	六〇九五・八 _瓦
二	二〇	八八・三	二六六・八 _五	四四九・九	一五・五 _三	三二七・三 _七
三	二〇	六九・八	一九八・七 _八	六七六・六	一五・二 _一	二八一・六 _五
四	一七	八四・七	一八〇・一 _四	四三二・五	七・九 _二	二三一・三 _一
五	一六	八九・六	一六八・〇 _四	八〇・八 _三	六・六 _〇	二五五・四 _七
六	一八	八四・二	一八〇・六 _五	一〇一・七 _四	一〇・二 _二	二九二・六 _一
七	二二	一七二・八	二八七・四 _五	一〇七・一 _四	六・七 _六	四〇一・三 _五
八	一五	一六三・七	二六〇・三 _九	七一〇・九	八・七 _八	三四〇・二 _六
九	二〇	二〇三・六	七九六・三 _三	八六八・一	一一・二 _六	八九四・四 _〇
十	二三	二二七・一	五四三・五 _二	六九四・〇	八・九 _八	六二一・九 _〇
十一	一九	一七六・三	一七九・四 _二	四六七・五	八・四 _四	二三四・六 _一

霧 露 霜	十二月	三〇	一九九二	三九二五三	六七八三	一九三四	四七九七〇
	合計	一三七	一七〇三	三九三七二	八九五八六	一三七二四	四九七〇三
		三五	四〇	一九七四〇	八〇九	五二六	二二〇六五
		二二	二五	三七〇二	四二二	五〇七	四六三〇
		七	一〇	二四六八	三二二	二七六	三〇五五

臨時部

米穀貯藏ニ關スル試験

一、米穀ノ乾燥ニ關スル試験

目的 米穀貯藏上最も重要ナル關係ヲ有スル乾燥問題ニ就キ乾燥ノ方法、程度、乾燥費等ニ關スル研究ヲ行ハントスルニアリ

經過 本年度ニ於テ粳十五石ヲ購入シ「ホフマン」式圓筒型乾燥器ヲ用キテ乾燥試験ヲ行ヒタリ
 成績 本年度ニ於ケル試験ノ成績ニ依レハ三〇—三五度ノ熱風ヲ送リ七時間ニ粳米ノ水分含量約三%ヲ低下セシムルヲ得タリ之ニ要シタル燃料及人夫賃合計ハ粳米三十石ニ對シ六圓ニシテ玄米一石ニ付約四十錢ヲ要セリト雖モ若シ之ヲ連續的ニ行フモノトスレハ一石ニ付約三十錢ニ節約スルヲ得ヘク即チ水分一%ヲ低下セシムルニ要スル乾燥費ハ玄米一石ニ付約十錢ニ該當スヘシ

二、米穀貯藏中ニ於ケル變化ニ關スル試験

目的 米穀貯藏中ニ於ケル諸種ノ變化ヲ檢定シ適當ナル貯藏法ノ研究ニ資セントスルニアリ

經過 本試験ハ前年度ニ繼續シ構造及建築材料ヲ異ニセル諸種ノ倉庫ニ貯藏セル乾燥ノ程度ヲ異ニセル各地產玄米ヨリ時々試験材料ヲ採集シテ品質及成分ノ變化ヲ試験調査セリ
 成績 乾燥不良ニシテ水分含量大ナル玄米ハ貯藏中漸次其水分ヲ減少シ之ニ反シ乾燥良好ナル玄米ハ稍水分ヲ増加シ長ク之ヲ貯藏スルトキハ兩者ノ水分含量漸ク相接近シ來ルヲ見ルヘシ
 尙本場附近產ノ粳ヲ購入シ人工乾燥ヲ行ヒテ乾燥ノ程度ヲ異ニシタル粳及玄米ヲ各種倉庫ニ貯藏シタル成績モ右各地產玄米ノ成績ト其軌ヲ一ニスルヲ見ル
 玄米ノ有機成分中蛋白質、脂肪及炭水化物ハ貯藏中多少ノ減耗ヲ免レス就中脂肪ノ損失最も甚シク之ヲ冷藏シタル場合ニ於テモ玄米ノ水分含量大ナル場合ニアリテハ其減耗量比較的大ナルヲ見ルヘシ

三、本邦各地方產玄米ノ水分檢定試験

其他理學的方法及肉眼的鑑定ニ依リ品質ノ調査ヲ行ヒタル成績ニ依レハ乾燥良好ナル岡山米、熊本米及人工乾燥ヲ行ヒタル粳及玄米ニアリテハ貯藏後二ケ年ヲ經過スルモ變化極メテ尠ナク唯濕度高キ煉瓦藏ニ貯藏セルモノハ稍變質セルヲ見タルニ過キス

目的 本邦各地方産玄米ノ普通ニ含有スル水分量ヲ檢定シ以テ玄米乾燥及貯藏上ノ參考ニ資セントスルニアリ

經過 大正六年以來三ヶ年間各地方米穀検査標準各等玄米ヲ採集シ「ホフマン」氏檢定法ニ依リ水分ノ檢定ヲ行ヒタリ

成績 本邦各地方産玄米ノ水分含量ハ最低約一二%、最高約一八%平均約一五%弱ニシテ概シテ東北、北陸及山陰地方ノ玄米ハ水分含量多ク年々ノ氣象狀態其他ニ依リ各府縣別ニ從ヘハ必スシモ玄米ノ等級ト水分ノ含量トハ關係アルヲ見スト雖モ各地方別平均成績及全國總平均成績ニ依レハ標準玄米等級ノ下ルニ從ヒ概シテ水分含量ノ遞次増大ナルヲ見ル

四、玄米ノ變質ニ關スル試驗

目的 米穀貯藏中微生物ノ作用ニ依リ生スル變質米ニ就キ其變質ノ原因及豫防法ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 最モ普通ナル變質米ハ所謂「カビ」米及「モス」米ニシテ甲ハ毛黴 (Asidia)ノ寄生繁殖ニ原因シ乙ハ青黴 (Penicillium)ノ繁殖ニ因ルモノトス本試驗ハ此等兩種ノ黴菌ニ就キ其病徵、形態、生理的性質、分類學上ノ位置、其繁殖ニ因ル玄米成分ノ變化及豫防法等ニ關スル研究ヲ行ヒタリ

五、白米ノ赤變ニ關スル試驗

目的 白米ノ貯藏中往々見ル所ノ赤色變質ノ原因及豫防法ヲ研究セントスルニアリ

經過及成績 前年來研究ノ結果恐クハ「ウースボラ」(Oospora)屬ノ黴菌ノ一新種ノ繁殖ニ原因スルヲ明カニシ更ニ其形態、生理的性質、其繁殖ニ依ル白米成分ノ變化及豫防法等ヲ研究セリ

六、玄米中ノ酵素ニ關スル試驗

目的 玄米中ニ存在スル酵素ノ種類ヲ檢定シ其貯藏中ニ於ケル此等酵素ノ増減ヲ明ニシ以テ米穀貯藏法研究ノ資ニ供セントスルニアリ

經過 本年度ニ於テ新古各種ノ粳及玄米ニ就キ各酵素含量ノ多少ヲ比較研究シタリ
成績 玄米ハ殆ント各種ノ酵素ヲ含有シ概シテ貯藏ニ依リ其作用ノ遞減スルヲ見ルモ就中古米ニ於テ其作用ノ微弱ナルハ過酸化酵素ニシテ之ヲ應用シテ容易ニ玄米ノ新古ヲ鑑別スルヲ得ヘシ

七、貯穀ノ燻蒸劑ニ關スル試驗

目的 從來一般ニ燻蒸劑トシテ使用セラル、二硫化炭素ニ代用セラルヘキ廉價ニシテ且安全有効ナル藥劑ヲ發見セントスルニアリ

經過 本年度ニ於テ各種「ベンゾル」誘導體、四鹽化炭素、硫化水素等ニ就キ燻蒸ノ効果ヲ研究セリ
成績 右各種藥品中燻蒸ノ效果優良ニシテ爆發ノ危險ナキモノ尠ナカラスト雖モ或ハ揮發性大ナラ

ス或ハ惡臭ヲ米穀ニ附與スル等種々ノ缺點ヲ伴ヒ未タ其目的ヲ達スルノ域ニ達セス目下引續キ試驗中ナリ

八、貯穀倉庫ノ構造ニ關スル試驗

目的 構造及建築材料ヲ異ニセル諸種ノ倉庫ニ就キ其内外ニ於ケル溫度及濕度ノ變化ヲ測定シ實際貯藏試驗ノ成績ト相俟テ貯藏ノ適否ヲ研究セントスルニアリ

經過 本場ニ於テハ前年來左ノ各種ノ倉庫ニ各地方產玄米及粳ヲ貯藏試驗中ナリ

- (一) 板藏、信濃藏、「コンクリート」藏、煉瓦藏
- (二) 簡易ナル移動倉庫(板倉及亞鉛板庫)
- (三) 井籠及「サイロ」(木製及鐵製)

成績 右各倉庫ニ於ケル貯藏試驗ノ成績ニ依リ倉庫内ニ於ケル溫度、濕度ノ多少及貯藏米ノ水分及品質ノ變化等ヲ綜合スルニ(一)ノ各種倉庫中「信濃藏」ヲ最モ適當ト認メ(二)ノ簡易ナル移動倉庫ヲ以テスルモ比較的變質ナク米穀ヲ貯藏シ得ヘク(三)ノ鐵製「サイロ」ハ最モ良好ナル貯藏器ナルヲ認ム

九、米穀貯藏法ニ關スル試驗

目的 從來行ハレ、諸種ノ貯藏法ニ關シ其適否ヲ攻究セントスルニアリ

經過及成績 前年來「サイロ」貯藏、保米袋使用、寒縮法、倉庫及苦鹽汁ノ撒布等諸種ノ方法

ニ就キ繼續試驗中ニ屬ス

一〇、氣象ノ米穀貯藏ニ及ボス影響ニ關スル調査

目的 氣象狀態ニ適應スヘキ米穀貯藏法ヲ攻究セントスルニアリ

經過及成績 前年來氣候ノ著シク異ナレル東北及九州兩地方ノ倉庫ニ米穀ノ貯藏ヲ委託シ倉庫ノ内外ニ於ケル溫度及濕度ヲ調査シ貯藏中ニ於ケル米穀ノ變化ヲ攻究セリ本調査ハ目下繼續中ニ屬ス

主要食糧農產物ノ改良増殖ニ關スル試驗

本場ニ於ケル試驗

一、水稻純系淘汰試驗

目的 純系淘汰ニ依リ在來水稻品種中ノ優良系統ヲ選出セントスルニアリ

經過 本年度ニ於ケル供試品種等左ノ如シ

(甲) 信州 六系統 純系淘汰第四年目(收量調査試驗)

愛國 六系統 第五年目

(乙) 品川 四系統 同 同

(丙) 關取 五系統 純系淘汰第五年目
 荒木 五系統 同 同

成績 右選出系統中優良ト認ムヘキモノ、反當玄米收量ヲ標準區ト比較スレハ左ノ如シ

供試品種 系統番號 大正八年度 二ヶ年平均

(甲) 信州 標準
 六〇一 一・七四五 一・九六九
 七二一 二・〇六五 二・一六三
 三ヶ年平均

(乙) 愛國 標準
 二 二・二三三 二・二九〇
 三 二・三七一 二・二六一
 四 二・三〇六 二・二八九
 二・二三七 二・二八二
 一・七六三 一・九三六
 二・〇六一 二・〇〇〇
 一・九六〇 一・九六二

(丙) 關取 標準
 三 二・〇六一 二・〇〇〇
 五 一・九六〇 一・九六二

(丁) 荒木 標準
 二五 二・二八九 二・〇九一
 二六 二・三四一 二・一八五
 二・三六九 二・一一六

二、水稻自然雜種ニ依リ固定シタル新品種ノ收量試驗

目的 自然雜種ヲ利用シ優良ナル新品種ヲ育成セントスルニアリ

經過 大正四年度ヨリ固定シタリト認メタル系統ノ收量調査ヲ行ヘリ

成績 優良ト認ムヘキ系統ノ玄米反當收量左ノ如シ

供試品種及系統番號 大正八年度 三ヶ年平均

愛國 標準
 九六 二・三二六 二・一五五
 九九 二・二二二 二・二二〇
 一〇六 二・二四三 二・一九五
 乙六八 二・二八一 二・三〇六
 二・二四六 二・二九五

三、陸稻純系淘汰試驗

目的 純系淘汰ニ依リ在來陸稻品種中ヨリ優良系統ヲ撰出セントスルニアリ

同 「フルツ」	小 麥 十 條	稷 麥 埼 玉 青	同 十 條	六八	六	五	二〇	二	一八	五三	四	四	四四
				標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準
				三・三四七	三・一九〇	二・四五三	二・二三五	二・二二二	二・〇六〇	二・一九一	二・五一一	二・六一〇	二・六九二
				二・九〇一	二・九三五	二・三三七	二・三〇四	二・二五八	二・一六二	二・二二〇	二・二二七	二・一八八	二・一八八

同 「フルツ」 (粉状質)	同 「フルツ」 (硝子質)	同 相 州	五七	六二	二	一七	四七	五一	ロ	ニ	ホ	チ
			標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準	標準
			二・六〇八	二・五三八	一・九六五	一・七七七	一・八四三	一・九四六	二・五六七	二・六八九	二・五二六	二・二八六
			二・二一五	二・一七四	二・〇六二	二・一一四	二・一一七	二・一八二	二・五七七	二・四八二	二・二六四	二・六六九

五、大麥自然雜種ニヨリ固定シタル新品種ノ收量試験
 目的 自然雜種ヲ利用シ新品種ヲ育成セントスルニアリ
 經過 本年度ハ「ゴールデンメロン」ノ自然雜種ヨリ固定シタル稷麥四系統皮麥八系統ノ收量試験第

四年目ニ當レリ

成績 右系統中優良ト認ムヘキモノ、反當收量左ノ如シ

供試品種 系統番號 大正七年度 四ヶ年平均

稗	七六	二・二五六	二・三五六
	八七	二・二四六	二・四三五

標準	一二	二・二九一	二・四一二
	二六	三・〇六四	三・〇八一
	三二	三・四七八	三・三六五
	三五	三・一二〇	三・四〇六
	四九	三・一二八	三・二三九
		四・〇五六	三・三五六

大麥

大麥

畿内支場ニ於ケル試験

一、稻及麥類新品種決定試験

目的 人工交配ニ依リテ育成シタル新品種ニ就キ其栽培價值ヲ決定セントスルニアリ

經過 全國ノ代表的品種ヲ標準トシテ三ヶ年ノ品種比較試験ヲナシ本年度編入セルモノ及前年度ヨ

リ續行セルモノ左ノ如シ

水稻

第一年目 育成新種 三四品種

第二年目 同 六二品種

第三年目 (一)育成新種 七品種
(二)同 九品種ノ分型四八系統

陸稻

第三年目 在來種五品種ノ分型二三系統

麥

第一年目 大麥五八品種、小麥四四品種

第二年目 在來種分型小麥二七系統

育成新種小麥二二品種

第三年目 在來種分型大麥四品種一九系統
小麥四品種四〇系統

皮麥「ゴールドンメロン」	同 關 取	小 麥 中 相 州	同 穗 揃	同 赤 小 麥	同 白 キ リ ス
原 二 種	原 一 種	原 四 種	原 六 種	原 四 種	原 二 種
六一九	六一八	六一六	六一五	六一五	六一八
三六〇	三三〇	二〇一	二一四	二八二	二七四
一四四七	一六三七	一六五二	一九一〇	一三一四	一六六七
一〇〇	一一三	一〇〇	二〇〇	一一九	一一九

二、府縣ニ配付セル新品種ノ成績調査
 目的 新品種決定試験ニテ優良ト認め府縣ニ配付セル新品種モ地方ニ依リ其生産能率ニ差異アルヲ以テ各地ヨリ地方在來優良種トノ比較試験ノ成績ヲ徴シ新品種ニ對スル適地ヲ決定シ併セテ新品種育成上ノ資トナサントスルニアリ
 經過 本年度ニ於テ配付セル地方及品種數ハ水稻四十五府縣、五十六品種、百八十七點ニシテ内前年

度決定試験終了ノ結果新ニ加ヘタル新品種十二品種三十四點、麥ハ二十五府縣、大麥四品種百十四點、小麥六品種百五十八點ナリ
 成績 明治四十二年本試験開始以來本年度迄配付シタル累計左ノ如シ
 水稻

早 稻	中 稻	晚 稻	計	大 麥	小 麥	計
品種數 七一	四七	七〇	一八八	九三	八四	一七七
點 數 六八五	五六六	七一	一九六二			

尙府縣ヨリ報告セル本年度ノ成績ハ今日迄到着セルモノ僅カニ十五ニ過キサレモ府縣ニ於ケル成績ノ一例トシテ一割以上ノ增收アルモノヲ左ニ掲出スヘシ (三ヶ年以上平均)

府縣名	種内新品番號	反當收量	在種來名種	反當收量	增收量	增收歩合
千葉	早一〇號	二九七〇	愛國	二五九〇	〇三八〇	一四七
岐阜	晚二七號	二四五四	埼玉	二二一〇	〇二四四	一〇
同	同三三號	二五六九			〇三五九	一六二
高知	早五六號	二六三一	穀良都	二三五八	〇五五五	二三五
群馬	同五六號	二八四九	三種平均	二五三九	〇三一〇	一二二
同	同七三號	二七九五	同	二五四三	〇二五二	〇九九
同	同七四號	二三四〇			〇三五〇	一七六
同	同二七號	二三六〇			〇三七〇	一八六
同	中九一號	二六〇六	二標準平均種	一九九〇	〇六一六	三一〇
同	同一二號	二三九七			〇四〇七	二〇五
同	無芒愛國	二七〇九			〇七一九	三六一
同	早二九號	二五六九	愛國一號	二三三二	〇二五七	一一一

三、水稻新品種ノ府縣ニ於ケル普及狀態調査
 目的 府縣ニ配付シタル新品種ノ地方ニ於ケル普及狀態ヲ調査シ品種改良上ニ資セントスルニアリ
 經過 府縣ニ照會シテ其報告ヲ徵シ或ハ特ニ技術者ヲ出張セシメ實地ニ就キテ調査ヲ爲セリ
 成績 本年度ニ於テ新品種中原種圃及採種圃或ハ其内何レカニ栽培サル、品種ハ二十一ニシテ一府

縣一千町歩以上ノ栽培面積ヲ有スル品種名及其府縣別反別ヲ示セハ左ノ如シ

品種名	新潟	富山	茨城	群馬	東京	京都	都	奈良	大阪
早二二號	二六〇〇町								
無芒愛國		四九二一町	三三〇〇町	四四五〇町	一三二八町				
早五六號			五三〇〇町						
早二四號				二九五〇町					
中二號							六五〇〇町		
神力一號								三二五三町	
雄町二號								六九一〇町	三九〇九町

備考 畿内新品種ノ營業者ニ依リテ栽培サル、見込反別合計ハ全國通計五萬一千五十六町歩ニシテ之ヲ大正七年度ノ一萬八千八百七町歩ニ比スレハ急激ナル増加ヲ示セリ
 元來本調査ハ頗ル困難ナルモノニシテ直接府縣ヨリ配布ヲ受ケス營業者間ニテ分讓シタルモノ或ハ名稱ヲ變更シタルモノ等アルヲ以テ實際ハ其面積尙ホ多數ナルヘシ
 四、多肥栽培ニ適スル品種撰抜試驗
 目的 育成新品種中多肥栽培ニ適スルモノヲ撰抜セントスルニアリ
 經過 當支場ニ於テ多年試驗ノ結果適當ナリト認メタル多肥栽培法ニ依リ神力種ヲ標準トシ普通作

ニ對照シテ收量、倒伏程度、耐病程度等ニ就キ三ヶ年ノ比較決定試驗ヲナセリ本年度試驗ニ供セル品種數左ノ如シ

第一年目 三八品種
第二年目 三七品種
第三年目 七〇品種

成績 本年度第三年目試驗ヲ終了セルモノ、中其成績優良ナル六品種ノ成績ヲ示セハ左ノ如シ

畿内番號	系統番號	肥料	成熟期	全長	難脫粒	難倒伏	耐病程度	均三ヶ年收量
晚三七號	神力×龜治Q _a	普多	一、二、三	三、八、七、二	難	II V	六三、二	三、五〇、五
晚二八號	宇佐錦×神力B ₈	普多	一、二、二	三、九、四、七	稍易	II V	七五、六	三、〇六、二
晚五八號	神力×愛國M _{5b}	普多	一、二、五	四、一、三、〇	難	III V	七五、六	二、九、三
晚四五號	神力×晚白笹A ₃₉	普多	一、二、七	四、一、五、一	難	III V	五三、八	三、〇〇、〇
晚一一號	神力×神力笹13 _a	普多	一、二、三	三、五、九、四	難	II III	七七、二	三、四、八、六
				三、四、一、九				三、一〇、四
								三、三、八、九
								三、〇、七、九

標	晚六五號	神力×晚白笹15 _a	普多	一、二、一、八	三、八、八、四	難	III VI	六六、〇	三、三、五、三
準	神	力	普多	一、二、六	三、四、九、〇	易	II VI <td>七八、七</td> <td>三、一、五、五</td>	七八、七	三、一、五、五
				一、二、二	三、八、四、三				三、一、六、四
				一、一、四	三、四、六、九				二、九、三、八

備考 大正五年度ヨリ本年度ニ至ル迄所謂多肥栽培ニ適スル新品種トシテ優良ナルモノ十七品種ヲ撰出シ得タリ

五、綠肥用植物ニ關スル試驗

目的 紫雲英、大豆、其他ノ綠肥用作物ヲ蒐集シ綠肥用植物ノ品種改良ノ材料ニ供セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テハ紫雲英二十一地方種大豆十五品種ニ就キ特性及生産能力比較試驗ヲ施行シ尙ホ紫雲英十九地方種、大豆百六十地方種ヲ蒐集栽培セリ何レモ目下繼續中ナリ

九州支場ニ於ケル成績

一、新品種價值査定試驗

目的 人工交配試驗ニ依リ育成セル稻新品種中優良ト認メタルモノ、價值ヲ査定セントスルニアリ
經過及成績 本年度ニ於テ栽培セル新品種名及其成績ハ左ノ如シ

九州第三號	九月五日	三六五	二〇六	六六	一八二	橙黃	無	中	三六五
同第四號	九月七	三六二	一四六	六三	一五四	白	無	下	三二四九
同第五號	九月一〇	三五〇	一九二	六八	二二七	白	極稀短	中	三三三
同第六號	九月一七	三五四	一九八	六六	一九二	赤	無	中	三五二
同第七號	九月一六	三五六	二五八	六四	一八一	白	無	中	三五四
同第八號	九月一五	三五四	二五四	六二	一七二	白	無	中	三五八
同第九號	九月二	三三六	二二九	六二	一八三	白	無	中	三四一三
同第十號	九月二	三五二	二三四	六三	二〇	白	無	中	三四八九
同第十一號	九月八	三三一	一九八	五八	一七四	白	無	中	三四八一
同第十二號	九月九	三三〇	二五二	六二	二二	赤	極稀短	中	三四七四
同第十三號	九月五	三三一	二五三	六〇	一八三	白	稀短	中	三四三三
同第十四號	九月五	三四一	二四〇	六七	一九四	白	稀短	中	三四六九
同第十五號	九月二	三四七	二二二	六九	一五七	白	無	中	三七〇六
同第十六號	九月二	三四七	二〇三	六三	一八九	橙黃	稀短	中	三三〇一
同第十七號	九月二	三四九	二二三	六二	一六二	白	無	下	三三〇六
同第十八號	九月五	三六六	一六九	六八	二〇一	白	無	下	三三二
同第十九號	九月九	三六二	二〇六	六七	一八九	白	無	下	三三〇八
同第二十號	九月八	三八〇	二四二	六七	一六九	白	無	中	三三二
同第二十一號	九月九	三五八	一九六	五九	二四二	白	無	下	三三二
同第二十二號	九月九	三五六	一五三	五七	二二三	橙黃	無	下	三三三

同第二十九號	九一九	三四四	一六四	六九	二四四	赤	無	下	三四六六
同第三十號	九一六	三六〇	二二九	六四	一九五	白	無	下	三四七一
同第三十一號	九一七	三八一	二四八	六四	一九四	白	無	中	三四三三
同第三十二號	九一七	三六九	二〇二	六一	一七三	白	無	中	三四三三
同第三十三號	九一八	三六三	一七六	七〇	二二二	白	無	中	三四三三
同第三十四號	九一八	三四一	二〇六	六九	二五七	白	稀短	下	三五五八
同第三十五號	九一八	三四一	一七六	六二	二五七	白	稀短	下	三五五八
同第三十六號	九一六	三五四	一八四	六二	二五四	橙黃	少短	下	三五〇一
同第三十七號	九一九	三八二	二〇六	六七	一八一	白	無	中	三三二七
同第三十八號	九一九	四〇四	一五三	七三	二〇〇	白	中	下	三三〇九

備考 九州第四十號ハF5晚白笹×雄町ニシテ他ハF6晚白笹×相徳ナリ

二、純系淘汰試験
 目的 在來栽培セル米麥ノ品種ニ就キ純系淘汰ヲ行ヒ優良ナル系統ヲ撰出セントスルニアリ
 經過 數年來繼續施行セル所ニシテ本年度ニ於テ栽培セル品種ハ左ノ如シ

- (1) 水稻
 - 神力第四年 三〇系統
 - 晚白笹第五年 一九系統
- (ロ) 陸稻

凱旋糯 第四年	九四系統			
霧島 第四年	九七系統			
(ハ) 小麥	十條×佛二十六號ヨリ得タル新品種第二年 五〇系統			
赤小麥 第五年	六〇系統			
(ニ) 稈麥				
鬼 稈 第五年	二三系統			
膝 八 第六年	二六系統			
成績 本年度ニ於テ成績良好ナル系統、出穂期、草丈、收量等ヲ示セハ左ノ如シ				
水稻神力 (第四年)				
系統番號	出穂期	草丈	莖數	反當收量
一〇九六四一	九月二二日	三・四九	二二六	三・三三四
	九月二二日	三・四六	二二三	三・二二七
	九月二二日	三・四六	二二九	三・二二二
	九月二二日	三・四五	二二四	三・四〇八
	九月二二日	三・四九	二二二	三・二七八

水稻晚白笹 (第五年)				
系統番號	出穂期	草丈	莖數	反當收量
一〇九八七六五四三二一	九月三日	三・六五	一七〇	三・三六九
	九月二九日	三・四三	一八五	三・六一五
	九月二九日	三・二四	二〇一	三・七三七
	九月二九日	三・四七	一八三	三・四二一
	九月二八日	三・五七	一九二	三・二五五
	九月二八日	三・四七	一九二	三・四四六
	九月二八日	三・四六	一七〇	三・四四六
	九月一九日	三・三九	一九二	三・一八一
	九月一九日	三・四七	一七六	三・三八五
	九月一九日	三・四三	一八二	三・四一四
	九月一九日	三・三七	二〇〇	三・二一四

小麥、赤小麥(第五年)

系統番號	出穗期	反當收量	系統番號	出穗期	反當收量
一	四月八日	一〇九七	對照原種	四月六日	一九七七
三	四月七	一〇九七	二八	四月六	一〇九七
五	四月七	一〇〇七	二九	四月八	一〇九七
八	四月九	一〇〇七	三〇	四月二	一〇九七
九	四月八	一〇六七	四一	四月一	一〇九七
一一	四月六	一〇七五	四四	四月〇	一〇九七
一六	四月六	一〇一〇	四九	四月三	一〇九七
一九	四月〇	一〇八〇	五三	四月八	一〇九七
二二	四月六	一〇七七	五五	四月六	一〇九七
三二	四月六	一〇三五	五五	四月六	一〇九七
三七	四月六	一〇六三	對照原種	四月四	一九七七
系統番號	出穗期	反當收量	系統番號	出穗期	反當收量
二	四月四	一四九一	八	四月七	一五七八
一	四月五	一七三一	七	四月五	一六五五

稈麥、鬼稈(第五年)

三	四月五	一七二四	對照原種	四月五	一七六四
四	四月五	一六七六	一〇	四月五	一七五八
五	四月六	一七〇三	九	四月五	一五二六
六	四月七	一六〇一			

稈麥、膝八(第六年)

系統番號	出穗期	反當收量	系統番號	出穗期	反當收量
八一	四月二日	三〇六六	八九	四月二日	三〇七〇
八二	四月八	二九八五	八〇	四月二	三〇二五
八三	四月九	二九六六	八一	四月〇	三〇五六
八四	四月八	三二〇五	八二	四月八	三〇〇一
八五	四月八	二四七九	八三	四月八	三四二五
八六	四月八	二九八四	八四	四月八	三二七八
八七	四月八	二八七一	對照原種	四月八	二九九〇
八八	四月九	三一二七			

陸羽支場ニ於ケル試驗

一、水稻及大麥新品種ノ價值比較試驗

目的 純系淘汰及人工交配ニ依リ育成セル水稻及大麥優良新品種ノ價值ヲ査定シ府縣ニ配付スヘキ
 品種ヲ決定セントスルニアリ
 經過 本年度ニ於テハ水稻九十一種大麥四十二種ニ就キ試驗ヲ行ヒタリ
 成績 大麥ハ尙繼續試驗中ナルモ水稻ニアリテハ左記十種ヲ撰拔シ之レヲ秋田縣外二十三府縣農事
 試驗場ニ配付セリ今各種ノ特性及收量ヲ示セハ左ノ如シ

陸羽支場系統番號	出穂	成熟	草丈	莖數	強弱ノ有芒	玄米位	稻熱病ノ普通肥料區ノ平均收量	多肥區ノ收量
121 關山純系	八月三日	九月五日	三九七	八	最強	中下	—	二五七
122 同	八月三日	九月三日	三九〇	四	同	中上	—	三二四
123 豐國純系	八月三日	九月二日	三八二	一〇	同	上	—	三二六
124 愛國×龜之尾	八月六日	九月二日	三六七	一〇	同	中	—	三〇八
125 愛國×龜之尾	八月二日	九月二日	三四九	四	最強	中上	—	三五八
126 愛國×龜之尾	八月二日	九月二日	三五〇	三	同	上	—	三五〇
127 愛國×龜之尾	八月八日	九月七日	三四四	二	同	中上	—	三二〇
128 敷島×龜之尾	八月七日	九月三日	三六一	二	同	同	—	三三九
129 敷島×龜之尾	八月二日	九月五日	三五四	二	同	同	—	三五八
130 敷島×龜之尾	八月七日	九月三日	三七七	二	同	上下	—	三六七

關山純系	豐國純系	愛國×龜之尾	豐國×龜之尾
八月六日	八月三日	八月二日	八月二日
九月二日	九月二日	九月二日	九月二日
三六七	三九〇	三四九	三五〇
八	四	三	三
最強	同	同	同
長	無	同	長
中	上	上	中上
強	最弱	強	強
二〇八	二六二	二八三	二八三
二四七	二六四	二八六	二八六

二、稗及粟ノ品種比較試驗

目的 稗及粟ノ優良品種ヲ撰定セントスルニアリ

經過及成績 本年度ニ於テ試驗ニ供シタル品種數ハ稗四二種、粟一二種ニシテ尙繼續試驗中ニ屬ス

三、陸稻、麥類、雜穀及馬鈴薯ノ純系淘汰ニ依ル品種育成試驗

目的 陸稻、麥類、雜穀及馬鈴薯ニ就キ純系淘汰ヲ行ヒ優良品種ヲ撰出セントスルニアリ

經過 本年度ニ於テ試驗ヲ行ヒタル作物ノ種類及系統數左ノ如シ

陸稻	四品種	一一系統
小麥	二品種	一六六系統
大豆	一品種	九三系統
稗	二品種	三八系統
粟	五品種	四二系統

成績 本年度試驗ノ成績良好ナリシ系統ノ收量ヲ示セハ左ノ如シ

品名	陸羽番號	反當收量
粟	一二	三・七〇八〇
品	一三	三・六六一五
種	一八	三・六三六四
名	三〇	三・五一八七
均		
津	二二	〇・九四〇四
同	二三	〇・七七一三
同	二四	一・〇六九一
同	二五	一・一〇〇六
同	二六	〇・七〇七三
同	二七	一・〇五〇二
同	二八	一・〇九八〇
同	二九	一・〇三五〇
同	三〇	一・九〇九〇
同	三一	二・二二九五
同	三二	一・〇三八四
同	三三	一・六三七一
同	三四	

品名	陸羽番號	反當收量	反當收量	
			中	上
大豆	一二	一・九五九六	一	一
品	一三	三・〇三四五		
種	一八	三・三二五七		
名	二二	三・三七六五		
均	二五	三・三七五三		
山	二六	三・三八五八		
同	二七	三・三七八〇		
同	二八	二・七二八三		
同	二九	三・七四一七		
同	三〇			
同	三一			
同	三二			
同	三三			
同	三四			

同	「カ	ラ	ス	ハ	シ」	三五	一・八五二四
同	同	同	同	同	同	原	二・〇三〇七
同	同	同	同	同	同	一一	二・三〇三九
同	同	同	同	同	同	一一	二・五七七三

四、馬鈴薯ノ新品種育成ニ關スル試驗
 目的 實生若クハ分型ニ依リ馬鈴薯ノ優良ナル新品種ヲ撰出セントスルニアリ
 經過 本年度ニ於テハ根室及五郎八兩種ニ就キ其實生種ノ收量比較、「アーリーロース」種ニ就キ優
 型及耐病性型ノ分離試驗ヲ行ヘリ
 成績

耐病性ノ分離	實生種ノ收量		反當收量		同種根室(四九五貫) 同五郎八(三四七貫) 同根室(四一五貫) 同五郎八(二八九貫)
	乙區	甲區	二五〇貫未滿	二〇〇貫以上	
	五	五	三〇〇貫未滿	二五〇貫以上	
	四	五	三五〇貫未滿	三〇〇貫以上	
	三	二	四〇〇貫未滿	三五〇貫以上	
	一	一	四五〇貫未滿	四〇〇貫以上	
	二	四	五〇〇貫未滿	四五〇貫以上	

標準原種平均反當收量 四〇九貫
 疫病ニ耐ユル優型同 五〇〇
 疫病ニ罹リ易キ型同 三〇八

雜件
 圖書

報告書發刊 大正八年度中發刊セル報告書ノ名稱及部數ハ左ノ如シ

名	稱	部	數
大正六年及同七年度農事試驗場事務功程		各	三〇〇
農事試驗場報告第四十四號		各	一、三〇〇
農事試驗場特別報告第三十一號		各	一、〇〇〇

報告書發送 大正八年度中發送セル報告書ハ内外國ヲ通シ其部數五千九百六十九ナリ
 圖書類收受 大正八年度中寄贈圖書類ノ收受數ハ和書千二百二十五部洋書七百六十三部ナリ

種苗配付

農作物種類改良ノ促進ヲ圖ラムカ爲メ本支場ニ於テ試驗上良好ト認メタル種苗等ヲ官衙、公署、農業團體及篤志者ノ請求ニ應シ配付シタル點數ハ二萬九千六百五十九點ナリ

野鼠室扶斯菌ノ配布

野鼠驅除用トシテ各府縣官署及農業團體ノ請求ニ應シ野鼠室扶斯菌ヲ培養シテ配付シタルモノ五十八點ナリ

請求分析

肥料取締法ニ基キ必要ト認メ若クハ取締上參考ノ爲メ大正八年度ニ於テ各府縣廳ヨリ請求シタル分析數及成分數ハ左ノ如シ

本支場別	件數	成分數
本場	二二三	五五二
畿内	二八	八三
九州	四	八
陸羽	二六五	六四三
計		

依頼分析

大正八年度ニ於テ公衆ノ依頼ニ應シ肥料、土壤、農産物等ニ就キ分析ヲ行ヒタル件數、成分數及手數料ハ左ノ如シ

供試品	項目		本場	畿内	九州	陸羽	計
	手數	成分數					
肥料	件數	成分數	一、四四〇・〇五〇	二七九〇〇	三三、〇〇〇	五八、五〇〇	一、五九一・二〇〇
土壤	件數	成分數	八四〇・〇〇〇	—	—	三〇〇〇	八七〇〇〇
飼料	件數	成分數	五四〇〇〇	〇・八〇〇	—	—	六、二〇〇
農産物	件數	成分數	四〇〇〇〇	—	—	—	四〇〇〇〇
農産製造品	件數	成分數	—	—	—	—	—
計			一、五〇〇	—	—	—	一、五〇〇

陸羽支場

二人

計

七六人

大正九年八月十七日印刷
大正九年八月二十日發行

農事試驗場

(東京西ヶ原)

東京府北豊島郡巢鴨町三丁目十番地

印刷者 大久保秀次郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所 株式會社東京樂地活版製造所

205

終